

日本独文学会
2010年 春季研究発表会

研 究 発 表 要 旨

2010年5月29日（土）・30日（日）

第1日 午前10時より

第2日 午前10時より

会場 慶應義塾大学

（日吉キャンパス）

目 次

第 1 日 5 月 29 日 (土)

ドイツ語教育部会講演 (13:20~14:20) B 会場：地下 2 階 DB202 教室

「学びと授業を問い直すー教育心理学の視点からー」 鹿毛 雅治 (慶應義塾大学)

シンポジウム I (14:30~17:30) B 会場：地下 2 階 DB202 教室

〈ドイツ語教育部会企画シンポジウム〉

外国語を学ぶ意欲を育てるためにー学際的な視点からー

Förderung der Motivation zum Fremdsprachenlernen

ー eine interdisziplinäre Perspektive ー

司会：吉満 たか子, 藤原 三枝子

- | | |
|--|-------|
| 1. 外国語学習における動機づけ：個人差の観点から | 廣森 友人 |
| 2. 協調・探究型アプローチの授業実践 | 太田 達也 |
| 3. 複数外国語を学ぶ意欲を育てるための外国語教育 | 大木 充 |
| 4. 学習を促進するための社会的な学習環境デザイン
ー教育工学の立場からー | 望月 俊男 |

シンポジウム II (14:30~17:30) C 会場：地下 2 階 DB201 教室

生誕 200 年ローベルト・シューマンー言葉と音楽

Robert Schumann. Der 200. Geburtstag ー Wort und Musik ー

司会：関口 裕昭

コメンテーター：掛谷 勇三

- | | |
|--|-------|
| 1. アイヒェンドルフの詩によるリーダークライス Op. 39
ー「連作歌曲」としての解釈 | 岩川 直子 |
| 2. シューマンとハイネー「詩人の恋 Op. 48」を中心に | 関口 裕昭 |
| 3. ローベルトとクララ
ークララ・シューマンの作曲活動をめぐって | 山下 剛 |
| 4. ローベルト・シューマンのオペラ『ゲノフェーフア』の再評価の
可能性ーマルティン・クーシェイの演出を手がかりとして | 佐藤 英 |

招待講演 (12:00~13:00) D会場:1階 D101 教室

Paul Michael Lützeler (Washington University in St. Louis)
„Bürgerkriegsdarstellungen im deutschsprachigen Roman der Gegenwart“

シンポジウムⅢ (14:30~17:30) D会場:1階 D101 教室

項構造の交替—他言語との比較をもとに

Veränderung der Argumentstruktur

— Deutsch im Vergleich zu anderen europäischen Sprachen —

司会: 鈴木 直樹, 中山 豊

- | | |
|---------------------|-------|
| 1. 非人称受動を可能にするものは何か | 宮下 博幸 |
| 2. 事象動詞の非人称化をめぐる | 高橋 亮介 |
| 3. いわゆる状態再帰の形成原理 | 大矢 俊明 |
| 4. S-型受動とドイツ語 | 鈴木 直樹 |

口頭発表: 語学 (14:30~17:05) E会場:2階 D201 教室

司会: 中山 純, 森 泉

- | | |
|--|---|
| 1. 完了形の文法化再考—文体の視点から— | 黒田 享 |
| 2. 日本語とドイツ語における名称に付随するジェンダー・
イデオロギーの考察 | 西野由起江 |
| 3. コーパスに基づくドイツ語文形成規則の分析
—方法論的考察と分析結果の中間報告— | 在間 進
カン・ミンギョン |
| 4. Abenteuer japanisch-deutsche Lexikographie:
Das Große japanisch-deutsche Wörterbuch
—Voraussetzungen, Entstehung und Potential— | Irmela Hijjya-Kirschneit
Wolfgang Schlecht |

口頭発表: 文学 1 (14:30~17:45) F会場:2階 D202 教室

司会: 和泉 雅人, 山本 賀代

- | | |
|--|-------|
| 1. 哲学の危機としての「郵便危機」
—バッハマン『マーリナ』における「郵便の問題」について— | 徳永 恭子 |
| 2. „... ich schreibe Ihnen in höchster Angst und fliegender Eile ...“
—インゲボルク・バッハマンの時間経験について— | 前田 佳一 |

- | | |
|---|-------|
| 3. ゴットフリートの『トリスタン』におけるリヴァリーンと
ブランシェフルールのミンネ | 田中 一嘉 |
| 4. エーリヒ・ケストナーのカバレット作品における他の作家の
作品への諷刺的表現に関する考察 | 高坂 朋子 |
| 5. 〈奇跡〉と〈善〉の短篇『トンカ』
— ムーゼル文学における「道徳的空想」の概念 — | 清原 明代 |

口頭発表：文化・社会 1 (14:30~17:05) G 会場：2 階 D203 教室

司会： Mechthild Duppel-Takayama, 岩下 真好

- | | |
|---|-------|
| 1. グリム, ベヒシュタインからマーラー《嘆きの歌》へ
— テキスト改変の起点としての作品論 — | 山本まり子 |
| 2. ベートーヴェン《第9》解釈の系譜
— ハインリヒ・シェンカーを中心に — | 西田 紘子 |
| 3. パイロイトのドイツ・ロマン主義に関する研究
— ジャン・パウルの理想郷から — | 川西 孝男 |
| 4. 映画・自殺・ヒトラー — ハンス=ユルゲン・ジーバーベルク
『ヒトラー, ドイツ生まれの映画』について — | 荒井 泰 |

ポスター発表 (13:00~14:30) H 会場：地下 1 階 コミュニケーション・ラウンジ

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

- | | |
|---|-------------------------|
| • Wie wirken E-Mails japanischer Deutschlernender auf deutsche
Muttersprachler? | Axel Harting |
| • Die Rolle der kritischen Reflexion über das eigene Lehrverhalten im
Fremdsprachenunterricht
— eine Projektvorstellung und eine methodische Diskussion — | 石塚 泉美 |
| • Sprachlernmotivationsbiographien | Julia Christine Schaaaf |
| • Leben in und gegen die Diktatur
— Wie die Menschen die Diktatur ignorierten — | Frank Riesner |
| • 宗教改革時代における印刷ビラ
— 読み聞かせのコミュニケーション — | 芹澤 円 |
| • ドイツにおけるトルコ系移民の若者のことば
— „Kanak Sprak“の言語的特徴 — | 田中 翔太 |
| • グリム『ドイツ伝説集』における配列と四大要素 | 植 朗子 |

第2日 5月30日(日)

シンポジウムⅣ (10:00~13:00) D会場:2階 D203教室

心態詞の音声と意味:新しい研究手法の開発にむけて

Aussprache und Bedeutung der Modalpartikeln:

Zur Entwicklung neuer Untersuchungsmethoden

司会: 岡本 順治, Angelika Werner

1. schon の韻律的特徴と意味・機能
Prosodie und Bedeutung der Partikel *schon* 生駒 美喜
Angelika Werner
2. 幼児はどのようにして命令文の中で doch を使うようになるか? 牛山さおり
3. 心態詞 mal の意味・機能—話し手・聞き手の信念を手がかりに— 筒井 友弥
4. 心態詞を使った発話の意味を実験的に捉える試み 岡本 順治

シンポジウムⅤ (10:00~13:00) C会場:2階 D202教室

アーカイヴの思想をめぐって

Über die Philosophie des Archivs

司会: 桑川 麻里生

1. ヴァルター・ベンヤミンの美術論と歴史的時空間の検索術 松井 尚興
2. 舗装道路と「印刷された問題 (printed matter)」
—アーカイヴ・モデルとしての芸術作品— 上崎 千
3. 筆跡というインデックス 遠藤 浩介
—世紀転換期における手書き文字コレクションと筆跡学
4. 記憶の伝達可能性—ゲルハルト・リヒターの絵画連作 林 志津江
『1977年10月18日』を手がかりに—
5. 集合的記憶の私的記憶化—中世ヨーロッパにおける「白鳥の騎士
伝説」の貴族家系の年代記への移入 會田 素子

口頭発表：文学 2 (10:00～12:35) E 会場：2 階 D201 教室

司会：香田 芳樹, 石原 あえか

1. ホーフマンスタール『影のない女』
－「しるしと詩句」に向かう言葉－ 安徳万貴子
2. 《ナクソス島のアリアドネ》における変容－瞬間に宿る永遠－ 野口 方子
3. ザクセン類型喜劇における「裁き」の構造と諷刺－クヴィストルプ
の『山羊裁判』とゴットシェート夫人の『遺言状』を例に－ 小林英起子
4. ゲルステンベルク『ウゴリーノ』 今村 武
－疾風怒濤最初期のダンテとシェイクスピア受容－

口頭発表：文学 3 (10:00～12:35) F 会場：2 階 D202 教室

司会：八木 輝明, 鈴木 伸一

1. 芸術家と原像－Fr. シュレーゲルとロマン派の視点から－ 毛利 真実
2. 異教との架け橋－ボブプロフスキーの短編『D.B.H.』について－ 永畑 紗織
3. Schweigen des Verstummen. – Stille Rebellion und aggressive
Gehorsamkeit in Thomas Bernhards Drama „Ein Fest für Boris“ – Reika Hane
4. Krieg und Frieden bei Peter Handke Leopold Federmaier

口頭発表：ドイツ語教育 (10:00～11:55) G 会場：2 階 D203 教室

司会：Marco Raindl, 北條 彰宏

1. コンテンツとタスク中心のドイツ語教授法 濱野 英巳
－初習ドイツ語学習者が文法能力とコミュニケーション能力を
統合することは可能か？－ Michael Schart
2. „Sprachaufmerksamkeit“ im Grammatikunterricht: Angela Lipsky
Überlegungen zur Vermittlung des Artikelgebrauchs im Deutschen
3. Wie wurde das Lernverhalten unserer Studierenden durch Testlernen Ralph Degen
geprägt? – Anregung zu einer Auseinandersetzung mit dem Thema
„Washback-Effekt“ in Japan –

口頭発表：文化・社会 2 (12:00～12:35) G 会場：2 階 D203 教室

司会：Marco Raindl, 北條 彰宏

1. Der Baader-Meinhof Komplex: Buch – Film – Realität Christian W. Spang

ブース発表（11:30～13:00） I会場：地下1階 DB109 教室

（ブース発表は途中での出入り自由です。）

- ・ クラウドを活用したドイツ語の授業
－Google のサービス群を中心に－

三澤 真

学会期間中、上記のプログラムに加えて、下記の展示が行われます。

- ・ 書店・出版社等による各種展示
- ・ 関口存男の足跡－関口存男語学文例集を中心に－
関口存男は生前、研究資料として英独仏他の言語の文例を哲学・文学・科学などの書籍や新聞記事から写し取っていました。枚数約 30,000、ファイル数 88 巻におよぶこの膨大な原資料はその後、ご長男である関口存哉氏のご尽力により分類・整理され、内外の研究者の協力も得て、「関口存男語学文例集」という形で一般に公開されることとなりました。本展示では慶應義塾大学日吉図書館に収蔵されているこの文例集を中心に、その偉大なる足跡を辿るべく、存男ゆかりの品々をご紹介します。
- ・ アーカイヴの思想と仕事
－慶應義塾大学アートセンター・アーカイヴセクションの作業現場から－
慶應義塾大学アートセンターでは、日本の現代諸芸術に関する資料・文献を蒐集しながら複数のアーカイヴを構築するとともに、アーキヴィストの養成も行なっています。本展示では、アーカイヴの収蔵資料の中から、「ドイツ語圏」および「ヨーロッパ」に関連するものを中心にご覧いただくと同時に、「歴史の作り上げられる工房」としてのアーカイヴという装置自体もご紹介したいと考えています。

第1日 5月29日(土)

ドイツ語教育部会講演(13:20~14:20) B会場:地下2階 DB202教室

学びと授業を問い直す—教育心理学の視点から—

鹿毛 雅治(慶應義塾大学)

教えなければ学ばない。教えれば学ぶはずだ。われわれにはこのような思い込みがある。しかし、授業などの教育の場をつぶさに観察すると、教えたつもりでも学んでいなかったり、教えなくても学んでいたりするという興味深い現象が至る所で起こっていることに気づく。今回の講演では、教育心理学の視座から、学びが「教えることを前提とした活動」であるという信念を相対化し、「そもそも学びとは何か」、「教師の役割は何か」というテーマについて、原理的に問い直してみたい。

近年の教育研究で主に重視されている考え方は認知的および社会的構成主義だといえるだろう。個人的・認知的側面から社会・文化的側面に至るまで構成主義という考え方には幅広い意味内容が含まれているが、およそ以下のような学習論としてまとめることができる。すなわち、構成主義は①学習とは、学習者自身が能動的に活動することによって知識を構築していく過程であること、②知識やスキルは文脈から切り離されるのではなく、状況の中で、状況に依存して学ばれていくこと、③学習は共同体の中での社会的な相互作用を通じて行われるということを示唆している。この考え方に立つならば、教えるとは「学習者の主体的な学習活動を成立させる営み」だということになり、直接的な教授行為のみならず、学習環境をデザインし、学習活動をモニターしつつ、環境を調整(再デザイン)するトータルな活動が教師の仕事の中核だということになるに違いない。

教育心理学の諸理論や学習科学の統合的な知見を総合すると、少なくとも以下の7つの視点(学習者側の要因として検討すべきポイント)のすべてを考慮に入れて学習環境をデザインし、臨機応変にダイナミックな実践を展開することが望ましいといえる。すなわち、①学び(わかること、できること、そのプロセスと成果)の重視、②個性(一人ひとりの違い)の重視、③意欲(興味、学ぶ意味・価値・必然性、自信)の重視、④思考(自己制御学習、問題解決過程)の重視、⑤協働(他者とのかかわり、対話と学びあい)の重視、⑥表現(多様なメディアによるコミュニケーション)の重視、⑦体験(五感をフル活用す

るような多様な活動)の重視である。

ここ十数年、教育改革や教育学界の底流を成すスローガンとして「教えから学びへ」が唱えられてきたが、そこで想定されている学びは、「台本に沿った積み上げ型の学び」ばかりではなく、「ライブの学び」、「ブレイクスルー型学び」、「大きな学び」が含まれており、それらの学びを通した自己の成長を意味している。われわれは、以上のような教育方法の原理の転換と学びの再定義を、「教えから学びへ」というスローガンから学び取るべきなのである。

シンポジウム I (14:30~17:30) B会場：地下2階 DB202 教室

〈ドイツ語教育部会企画シンポジウム〉

外国語を学ぶ意欲を育てるために—学際的な視点から—

Förderung der Motivation zum Fremdsprachenlernen

—eine interdisziplinäre Perspektive —

司会：吉満 たか子， 藤原 三枝子

大学設置基準の大綱化以来、外国語を提供するか否かは大学の裁量に任されている。また、中国語や韓国語(朝鮮語)など、以前に比べて選択肢が増えた。こうした事情を背景にドイツ語履修者の数は確かに減っているが、ドイツ語を選択した学習者の学習開始時の意欲は決して低くはないように思われる。Dörnyei (2001) が、「本当に外国語を習得したいと願う学習者の 99%は、言語適性とは関係なく、最低限、かなりの役立つ知識を身につけることができる」と主張しているように、授業に対する学生の「やる気」は、授業それ自体や学習効果に大きな影響を与えるものである。しかし、4月から学年末までこの「やる気」を維持させることが困難であることを、教師であれば誰もが実感しているのではないだろうか。

学習者要因の中でも、動機づけはドイツ語教育においても頻繁に言及されるテーマである。また、動機づけの重要性を認識し、「楽しく」学ぶことを前面に押し出したシラバスや教材も少なくないが、外国語学習が「楽しい」という内発的な動機づけは一体どのようなときに生まれるのか、動機と言語習得にはどのような関連があるのか、外国語学習に特徴的な動機づけは存在するのか、そもそも継続的なドイツ語学習へ学生を動機づけることは可能なのか、など、ドイツ語教育において動機づけが包括的、学際的に考察され議論されたことはこれまでほとんどなかったと言ってよいだろう。そこで、2010年の春季学会にお

いてドイツ語教育部会はシンポジウムを開催し、「外国語学習への動機づけ」について考察・議論の場を提供したい。

シンポジウムではまず、外国語教育一般にフォーカスを当て、外国語の授業において内発的な動機づけを高め、主体的な学びの意欲を高めるための学習活動について、英語教育から廣森友人氏に、ドイツ語教育からは太田達也氏に、理論的背景を踏まえた実践についてお話しいただく。続いて、日本の大学におけるドイツ語やフランス語の学習に対して、学習者が価値を見出すためには、どのような働きかけが重要となるのかを、国内外で実施した質問紙調査をもとに大木充氏にご発表いただく。最後に、教育工学の立場から、学ぶ意欲を育むような教育環境を具体的にデザインするためにはどのような観点を基盤とすべきなのかを望月俊男氏にお話しいただく。発表後は、フロアとの質疑応答や、学びという広い視点、外国語教育において内発的な動機づけを高めるための具体的な方略、そのための教育環境のデザインの3つの観点からのパネルディスカッションを行う。

《お知らせ》

シンポジウムに先立ち、同会場において鹿毛雅治氏（慶應義塾大学）による講演「学びと授業を問い直す ―教育心理学の視点から―」が開催されます。この講演はシンポジウムとの連動企画です。シンポジウムでの議論を深めるためにも、併せてご参加いただければ幸いです。

1. 外国語学習における動機づけ：個人差の観点から

廣森 友人

教師が日常の教育活動を行う上でとりわけ関心を持つのは、目前の学習者の動機づけをどのように高めたらよいかということだろう。実際、教育現場においては、教師は長きにわたって、学習者の動機づけの問題に試行錯誤してきた。そのような現状に対して、教育活動一般を対象とした研究や、外国語学習に特化した研究の成果からは、数多くの有益な知見を得ることができる。

例えば、Epstein(1988)は、授業を構成する主要要素を課題、権限、報酬、グループ化、評価、時間に分類し、教師は授業の中でこれらの要素をうまく操作することによって、学習者の動機づけを高めることができるとしている。外国語学習の研究文脈でも、例えば、Dörnyei & Csizér(1998)は、語学教師200名を対象とした調査から、「外国語学習者を動機づける10ヵ条」をまとめている。

本発表では、これらの研究の動向と課題を確認し、その知見を基盤とした教育実践的示唆について述べる。具体的には、いくら効果的だと思われる指導法

が開発されたとしても、それらが唯一絶対だと考えるには慎重になるべきだということである。例えば、すでに高い動機づけを有している学習者に求められる指導法と、そうでない学習者に求められる指導法は異なる。さらに、そこに語学力、性格、学習スタイルの違いなどが影響を与えている。このような個人差を踏まえた指導こそが、より求められると考える。

2. 協調・探究型アプローチの授業実践

太田 達也

客観主義的な教育理論や行動主義的な学習観から、構成主義的な学習理論へとパラダイムがシフトするのにもない、外国語教育のあり方にも大きな変化が生じている。文法を例にとるならば、教科書などに記述された「外在的文法」を知識として伝達し訓練するより、むしろ各学習者の中で構築されていく「内在的文法」の発展を促す環境を提供する、ということになるだろう。また、外国語教育の目標そのものも、単なる知識の伝達や4技能、コミュニケーション能力の育成ということを超えて、生涯学習を見据えての自律的学習能力やプロジェクト能力の育成も重要視されるようになってきた。こうした学習者中心の考え方において、教師はあくまで学習者が社会的相互作用を通して知識を構成していく際のサポート役であり、学習者が主体的に課題に取り組みながら問題を解決していくプロセスこそが重要となる。

発表者はこれまで、上のような理念に基づき、「協調・探究型アプローチ」によるドイツ語授業を実践してきた。このアプローチでは、「問題発見」など学習者の認知プロセスに重点を置いた活動を繰り返し行うことで、学習者の言語学習に対する意識が活性化される。また、他の学習者とともに課題に取り組みながら問題を解決していく活動を通じて、協調学習能力や自律学習能力が促進される。こうした学習者中心の活動は、達成感を実感させやすく、学習意欲の向上や学習の継続性にもつながっている。

3. 複数外国語を学ぶ意欲を育てるための外国語教育

大木 充

動機づけと十分な学習時間さえあれば、外国語学習の大部分の問題は解決する。この観点からすると、日本における従来の外国語教育研究は二つの大きな誤りを犯してきた。ひとつは、言語学が外国語教育にも役立つという勘違い。現代の言語学は、言語習得のメカニズムの解明には役立つかもしれないが、そ

の成果が教育現場で役に立つのはまだ何十年も先である。そもそも習得と教育は異なっていることを自覚するべきである。また、教育では費用対効果を考慮するべきである。言語理論で使われている専門用語が教育効果をあげるためのキーワードになっているようでは、費用対効果は低い。なぜなら、それを理解するのに時間とエネルギーが必要だからである。どんなに頑張っても「意味拡張」しても、動機づけは言語学の研究分野にならないだろう。

もうひとつの誤りは、英語教育で問題になっていることをその他の外国語教育の研究でもおこなってきたことである。英語とドイツ語やフランス語のおかれている社会的環境の差はますます大きくなっている。また、大学での外国語教育を考えた場合、その目的も到達目標も異なっている。動機づけの研究は、むしろ実用的に役に立たないドイツ語やフランス語に関して高い費用対効果が期待できる。

本発表では、国内外でおこなった動機づけに関するアンケート調査の結果を報告し、それに基づいて動機づけを高めるための具体的方策を示す。

4. 学習を促進するための社会的な学習環境デザイン

—教育工学の立場から—

望月 俊男

教育工学における学習環境デザイン論の観点から、学習者の学びを促すための社会的な学習環境デザインのあり方について考察する。近年 e-Learning のような自律的な学習環境が増えてきているが、そうした学習は授業時間外に行われる。そこで、授業時間外の学びを促進する上で、学習者の共同体意識や、共に学ぶ他者の社会的存在感(social presence)に注目がなされている。人間はひとりで学習を継続することに困難を感じやすいが、共に学ぶ他者の存在によって助けられることが多い。たとえば、授業時間外に、お互いに相互に進捗を確認したり励ましたりすることができる学習環境をデザインすることで、学習に対しても社会的促進(social facilitation)をもたらすことが可能になる。

発表者は語学教育の研究者・実践者ではないので、大学のグループ学習の実践を題材に、携帯電話や Web を活用して、社会的存在感を増進する学習環境デザインを行った事例を報告し、社会的関係を取り持つさまざまなアーティファクトや空間のデザイン原則について 1 つのあり方を提示したい。

シンポジウムⅡ (14:30~17:30) C会場: 地下2階 DB201 教室

生誕 200 年ローベルト・シューマンー言葉と音楽

Robert Schumann. Der 200. Geburtstag — Wort und Musik —

司会: 関口 裕昭

コメンテーター: 掛谷 勇三

2010 年、生誕 200 年を迎えるドイツ・ロマン派の作曲家ローベルト・シューマンは、文学にも深い造詣を示したことで他に類を見ない存在である。若い頃からジャン・パウルを耽読し、一時は詩人になることも夢見た青年は、作曲家を職業に選んだ後も気鋭の音楽評論家として活躍した。作曲でも、ピアノ曲一辺倒であった初期を経て、1840 年「歌曲の年」と呼ばれるリートが多産な季節を迎え、晩年にはオペラやオラトリオも手掛けるなど、言葉と音楽の融合は生涯の課題であった。

シューマンにおける言葉と音楽の密接な関係は広く知られており、先行研究には枚挙に暇がない。しかしその殆どが音楽学者による、音楽を中心に据えた考察であり、詩やオペラのテキストと音楽とを綿密に比較した研究は、まだ本格的になされていないのが現状である。

最近のシューマン研究では、Heero や Hotaki によって、遺稿に埋もれていた初期の詩などの文学的習作が発見され(“Dichtergarten” 他)、また一部のみ公表されていた膨大な書簡の完全な刊行が始まるなど、資料面での充実が目される。そしてこれと連動して、リート of 成立過程が再検証され、これまで顧みられなかった晩年のオペラ、オラトリオの本格的評価が始まっている。つまり、文学者としての側面に急速に光が当てられ始めており、それに伴いシューマンの全体像にも少なからぬ修正がなされようとしている。

本シンポジウムではこうした新しい研究も視野に収めつつ、言葉と音楽の密接に融合したシューマンの世界への接近を試みる。4 人の発表者は、様々な切り口からその解明に挑むが、以下の 3 つのモチーフが通奏低音として流れているはずである。

- ①最新の資料を取り入れた、言葉と音楽の対応関係への具体的かつ実証的な考察・分析。
- ②シューマン音楽の特徴(「ツィクルス構造」「主題の変奏」)を、文学テキストにも応用した考察。
- ③日記や書簡から読み取れる、妻クララとの関係からみた新しい視点への提言。

シンポジウムでは、関口が全体の趣旨と研究動向を簡単に述べた後、岩川が「アイヒェンドルフの詩によるリーダークライス op. 39」を「連作歌曲」の観点から考察する。続いて、関口は同じ「歌の年」に作曲された「詩人の恋」を中心に、ハイネの詩と共鳴する「イロニー」を分析する。山下は、クララに焦点を当てて、夫ローベルトの音楽形成の過程を解明する。佐藤は晩年のオラトリオ『ゲノフェーフア』の成立を、テキストを照らし合わせながら明らかにする。

なお4名のゲルマニスト発表者に対し、演奏家の立場から助言と補足をするために、ピアニストの掛谷勇三氏（愛知県立芸術大学准教授）がコメンテーターとして参加する。氏の協力により、本シンポジウムを単なる文学者の繰り返言ではなく、文字通り言葉と音楽の融合した世界を解明する試みにしたいと考えている。

1. アイヒェンドルフの詩による「リーダークライス Op. 39」

—「連作歌曲」としての解釈

岩川 直子

1840年に突然泉のごとく溢れ出た数多くの「連作歌曲」の中でも、「アイヒェンドルフの詩によるリーダークライス Op. 39」は「連作歌曲」としての意味に関してこれまで多くの議論があった。12篇の詩の殆どがアイヒェンドルフの様々な小説『予感と現在』『詩人とその仲間たち』等の挿入詩で、各々の詩には特に内容的に繋がる関連性がないことから、Reklams Lied-Führerを著したW. エールマンが述べているように、Op. 39の連作歌曲としての意味は概ね次のように要約されてきた：「これら12の詩の間には行為の連関があるわけではなく、情調的に親近性のあるものや対比的なものを並べることで全体として一つの叙情的な複合体が形成されている」。

作品39の「連作歌曲」としての意味を作品の成立史から解明したH. クナウルの論文(1974)を手がかりに、その後W. デュルやH. J. ケーラー等がシューマンの個人的要素を軸とした連作の解釈に眼を向け始めた。こうした新たな解釈は、「アイヒェンドルフのテキストはシューマン自身ではなく、クララが選んだものであり、シューマンがそれらの詩に順不同に作曲後、自らの連作イメージに基づいて詩の順序を再構成した」という事実裏付けられている。曲に込められたシューマン自身のメッセージを読み解こうとする演奏も模索されるようになり、結婚に至るまでのローベルト、クララ、ヴィークの確執の物語と彼の心情を密かにロマン主義的 Stimmungの中に散りばめたシューマンの

音楽的技巧に目を向けると、アイヒェンドルフの世界とは一味違ったシューマン独自の世界が見えてくる。

2. シューマンとハイネー「詩人の恋 Op. 48」を中心に

関口 裕昭

シューマンは46年の生涯で約270曲の歌曲を残したが、選ばれた詩はハイネが40曲を越え最も多い。その中で「歌の年」(1840年)に作曲された「詩人の恋 Op. 48」は歌曲集の頂点をなす。

1828年ミュンヘンで出会った二人は、異なる時代と思潮に引き裂かれた存在であった。ピアノによる小規模の楽曲集から出発したシューマンは、連作歌曲集でも主題の操作による統一を図っているが、曲は常に言葉と伴奏がせめぎ合い、補い合う形で進行する。一方、ユダヤ人であったハイネの詩には、民謡調の親しみやすいリズムの背後に、自嘲と悲しみが絶えず揺れ動きながら存在していた。その二面性に気づいたシューマンはハイネの詩をテキストに選んだのであろうが、二人に共通する精神は、音楽と文学というジャンルを超えたIronieであったといえよう。

シューマンとハイネの関係を考察した研究には枚挙に暇がない。Brion, Walker, Rauchfleischらの伝記的研究、吉田秀和、Fischer-Dieskauらの歌曲分析がある。最近ではSynofzikによる『ハイネとシューマン—音楽とイロニー』(2006)が包括的かつ画期的な論考として注目される。

本発表では先行研究を吟味しながら、「詩人の恋」におけるツィクルス構造に着目し、16曲からなる現行版と、20曲からなる初版とも比較しながら、言葉の音楽が相互にどのような影響を及ぼしながら歌曲が構成されているかを、具体的に分析したい。

3. ローベルトとクララ

—クララ・シューマンの作曲活動をめぐって

山下 剛

ローベルトは結婚前からクララの作曲の才能を高く評価し、作曲を結婚後も続けるように励ました。二人は互いに影響し合い、合同で勉強し、合同で作品を出版するなどしている。そこには言葉と音楽による二人の間の豊かな交流の様子を窺い知ることができる。

しかし、クララは自らの作曲能力に関して自信と過小評価の間を激しく揺

れ動いており、結婚後作曲活動から徐々に身を引いてしまう。ここには、単に才能の優劣に還元できない当時の市民階級の価値観や夫婦間の力関係が大きく関わっており、その影響をまともに受けたのがクララの作曲活動だったと言えるのである。クララは音楽家としての自己実現の道を結婚によって断念する気持ちは毛頭なかった。そのために彼女は夫の作曲活動との共存、自身の音楽活動と家庭生活の両立という問題に悩み抜くことになる。

本発表では、クララの作曲活動や演奏活動をめぐるローベルトとの確執を具体的に明らかにしていきたい。また、文学テキストをめぐるローベルトとクララの関わり方についても具体的に取り上げ、特にクララ歌曲の特徴を探るつもりである。これらの考察を通し、一方で斬新な曲を次々生み出しながら、他方でさまざまな因襲や古い偏見に囚われていたローベルト・シューマンの二面性にも光が当たるはずである。

4. ローベルト・シューマンのオペラ『ゲノフェーフア』の再評価の可能性 —マルティン・クーシェイの演出を手がかりとして

佐藤 英

ローベルト・シューマンのオペラ『ゲノフェーフア』は、総記等の記述を読む限り、数ある彼の楽曲の成功に比べ、知名度が低く、オペラとしての真価も見出されてこなかった作品である。しかし、近年はこの作品の再評価の機運が高まり、上演の機会も徐々に増えてきている。このような上演を通じての作品の再評価に決定的な役割を果たしたのが、2008年にチューリヒ歌劇場において上演された、マルティン・クーシェイの演出による舞台であった。クーシェイは、いわゆる Regietheater の発想に基づき作品の読み替えを行い、刺激あふれる舞台を作ることに成功した。この公演はオペラ『ゲノフェーフア』初の公式ソースによる DVD として刊行され、今後のこの作品の解釈に際しての共通認識となることが期待されている。この重要性を考え、本発表ではこの映像資料を解釈することにより、シューマンの当該作品の台本面に新しい光を当てることを目標としたい。考察に際して特に力点を置くのは、従来は脇役と位置づけられたジークフリートが、新解釈において果たす役割である。彼を中心に舞台を見てゆくことにより、19世紀における理想の女性像にまつわる諸問題を発端に、この作品の現代的な意味を見出すことができるはずである。

招待講演 (12:00~13:00) D会場：1階 D101 教室

Paul Michael Lützel (Washington University in St. Louis)

„Bürgerkriegsdarstellungen im deutschsprachigen Roman der Gegenwart“

シンポジウムⅢ (14:30~17:30) D会場：1階 D101 教室

項構造の交替—他言語との比較をもとに

Veränderung der Argumentstruktur

— Deutsch im Vergleich zu anderen europäischen Sprachen —

司会： 鈴木 直樹， 中山 豊

ドイツ語圏の伝統的なヴァレンツ研究はもとより、80年代の生成文法が語彙情報の重要性に着目して以来、とりわけ動詞が持つ項構造は常にあらゆる言語理論の中心的トピックのひとつである。当初は、動詞がいくつ項をとり、それらがどのように統語的に実現するか、という特性は動詞個々に指定されていると考えられていたが、同一の動詞であっても複数の項構造を持ち得ることが明らかとなり、その交替現象をとらえるメカニズムに対して国内外においてさまざまな提案がなされてきた (Zaima 1987, Jackendoff 1990, Hale & Kayser 1993, Goldberg 1995, 影山 1996, Levin & Rappaport Hovav 1995, 2005, Wunderlich 1997)。このことは、さまざまな理論的背景を持つ多くの研究者が項構造の交替現象に対して多大な関心を寄せていることを示している。

このような背景をもとに、私達がドイツ語における項構造の交替現象を扱おうとする場合、常に非母語話者としてのハンディを自覚することになる。すなわち、どの動詞がどのような項構造を持ちうるのか、という基礎的なデータを収集する際にも困難を感じ、さらに得られた一般化に対しても十分に検証する手段を持たない。そこで本シンポジウムではドイツ語における項構造の交替、あるいは能動態から受動態への態の変更などに対して、ドイツ語の現象のみならず、他言語における同様なし類似の現象を考察することにより、より適切な一般化が可能であることを論じる。ここで得られる一般化は母語話者の直感のみに基づく一般化よりも抽象度の高いものとなり、したがって通言語的に妥当する、より意味あるものとなる可能性を含んでいる。さらにこのようなアプローチのもとでは、母語話者には気付かないドイツ語における「事実」を非母語話者から提示することも可能となる。

また、私達の母語である日本語とドイツ語を比較する重要性はもちろん否定しないが、本シンポジウムでは、おもに隣接する言語（すなわち他のゲルマン諸語ないしヨーロッパ言語）との比較を重要視する。それは、ドイツ語における項構造の交替という現象に対しては、日本語よりも隣接するヨーロッパ言語と比較することにより、より適切な一般化が可能になると予測しているためである。こうした前提のもと、第一発表者（宮下）はアイスランド語をはじめとする複数のヨーロッパ言語を、第二発表者（高橋）は英語を、第三発表者（大矢）はオランダ語を、第四発表者（鈴木）はノルド語を扱う予定である。

1. 非人称受動を可能にするものは何か

宮下 博幸

ドイツ語は1項動詞から非人称受動を形成する。これは受動文をもつ言語すべてに可能なわけではなく、オランダ語、アイスランド語、リトアニア語などで観察される一方、英語やフランス語では難しいことが知られている。本発表ではこの非人称受動がなぜドイツ語で可能であるかを、他言語との比較を通じ、とりわけ「機能的な観点」から考察する。具体的には、まずヨーロッパ言語で非人称受動が可能な言語に共通する特徴を探る。そこに浮かび上がるのは、非人称受動を許容する多くの言語で目的語をとる自動詞を受動化する際、能動文の格が保持されるという事実である。例えば、ドイツ語と同じく非人称受動が可能なアイスランド語でも、受動の際に与格が保持される。

(1) Stúlkunni var bjargað.

Dem Mädchen wurde gerettet. („Das Mädchen wurde gerettet.“)

本発表ではこうした構文の可否がそのまま非人称受動形成の可否につながることを論じたい。(1)は目的語が斜格で現れることにより出来事の生起に焦点が移動すると考えられるが、構文がそのような方向で拡張されることが、英語などと異なり、ドイツ語が非人称受動を許す要因となっているものと考えられる。またこのような見解は、通時的な非人称受動の発展 (Vogel 2006) とも符合するものであることを示したい。

2. 事象動詞の非人称化をめぐる

高橋 亮介

本発表では、Das Haus brennt./Es brennt. Das Telefon klingelt./Es klingelt. の対比に見るように、実質的な意味内容をもった名詞を主語とするドイツ語の事象動詞が、虚辞 *es* を伴う非人称的動詞としても振舞う現象を「事象動詞の非人称化」と名付けた上で、いかなる動詞がこの項構造上の交替現象に参与するのかという問題を語彙意味論的な観点から検討する。先行研究にお

いては、「知覚 (sinnliche Wahrnehmung)」を表す動詞が非人称化に参与するという指摘がなされているものの、この概念は粒度ならびに認定基準が不明確であり、例えば weinen のような動詞がなぜ Ich {sah/hörte} ihn weinen. のような知覚動詞構文に生じつつも非人称化を許容しないのか (Cf. *Es weint.) という問題に対して適切な説明を与えることができない。また、なぜ「知覚」を表す動詞が非人称化を示すのかという問題に関する検討もいまだ十分であるとはいえない。本発表では、非人称化が可能なドイツ語動詞に対応する英語動詞の多くが場所格交替を示すことを指摘し、これら文法現象に参与する両言語の動詞にとって真に関与的なのは「放出」の概念であることを主張する。その上で、「放出」の概念が各言語における文法現象とどのように関連するのかを、該当する動詞の語彙化パターンに着目しつつ考察する。

3. いわゆる状態再帰の形成原理

大矢 俊明

状態再帰 (Zustandsreflexiv) とは、Helbig & Buscha (2001) などにおいて「sein + 再帰動詞の過去分詞」により形成されると指摘されている (1) のような構文である。

(1) Er ist informiert/vorbereitet/erkältet.

Helbig & Buscha によれば、状態受動と異なり、状態再帰の主語は再帰動詞の主語に対応する。例えば状態受動 (2b) の主語は能動文 (2a) の 4 格目的語に対応するが、状態再帰 (3b) の主語は能動文 (3a) の主語に対応する。

(2) a. Der Mann schreibt den Brief.

b. Der Brief ist von dem Mann geschrieben.

(3) a. Der Mann erholt sich.

b. Der Mann ist erholt.

本発表では、この状態再帰について、まず 1) どのような再帰動詞から状態再帰が形成できるのかを示し、2) Helbig & Buscha の指摘をより一般化し、状態再帰の主語は常にいわゆる内項に対応することを指摘する。さらに 3) 状態再帰は状態受動と同様、形容詞化された過去分詞を含む構文であることを示し、4) sich erkälten をオランダ語と比較しながら議論することにより、この再帰動詞から状態再帰が形成される理論的意味合いを考察する。

4. S-型受動とドイツ語

鈴木 直樹

ノルド語にはS-型受動という、ドイツ語にはみられない受動形式が存在する。これは不定詞語尾に接辞-sを付加したもので、以下(1)(2)のような構造をいう。この構造は例えば「話す」という動詞ひとつをみても、デンマーク語 snakkes, ノルウェー語 snakkes, スウェーデン語 talas のように広範囲に観察され、ノルド語を他のゲルマン語と区別する大きな特徴となっている。

(1) Engelsk snakkes i mange land. 英語は多くの国で話されている。

(Englisch sprechen-sich in vielen Ländern.)

(2) Det arbeides også om søndagene. 日曜日にも仕事がある。

(Es arbeiten-sich auch an Sonntagen.)

こうしたS-型受動に加え、一般にノルド語はドイツ語が備えている受動表現をほぼすべて有している。werden (bli), sein (være), bekommen (få), 再帰代名詞 (seg), man (man/en)などである。つまり、ノルド語はドイツ語に比べて表現ツールがひとつ多い。従来、S-型受動とbli受動については、意味的な相違、法助動詞との共起、時制上の制約などが指摘されてきたが、本発表ではとりわけドイツ語的な観点からwerden受動・sein受動・状態再帰とS-型受動を比較し、ノルド語を観察することによりドイツ語のどのような側面を知り得るかを検証する。

口頭発表：語学 (14:30~17:05) E 会場：2階 D201 教室

司会：中山 純, 森 泉

1. 完了形の文法化再考 - 文体の視点から -

黒田 享

現代ドイツ語の現在完了形は過去形との機能上の重複が顕著である。完了形は諸ゲルマン語に存在するが、現在完了形の機能領域が過去形の機能領域を深く浸食したのはドイツ語特有の現象であり、その経緯が興味を引く。

現代ドイツ語における過去形と現在完了形の関係については Weinrich (1964)を始めとして多くの研究がなされてきたが、現在完了形による過去形の機能領域の浸食の歴史的経緯については Lindgren (1957), Oubouzar (1974), Grønvik (1986), Dentler (1994; 1997)などの研究があるものの、比較的数が

少ない。

現在、現在完了形の過去表現機能の拡張は初期新高ドイツ語期（16世紀）になってからなされたという考え方が取られることが一般的だが、これは叙事詩や年代記のような、過去の事柄を時系列に沿って再現するようなテキストの包括的観察に基づいている。中高ドイツ語期においてこのようなテキストで過去の事柄の表現に主として用いられたのは確かに過去形である。しかし、性格を異にするテキストである中高ドイツ語訳トマス・アクィナス「神学大全」では過去の表現における過去形の比率がやや高い。

中高ドイツ語期においても特定の文体的環境においては現在完了形が過去の表現として広範囲に用いられていたのかもしれない。完了形の文法化の経緯を適切に捉えるためには、従来はあまり取り上げられなかったようなテキストの調査も踏まえ、文体的環境も考慮に入れる必要があるだろう。

2. 日本語とドイツ語における名称に付随するジェンダー・イデオロギーの考察

西野由起江

本発表では、女性性、男性性を示す名称の中で各ジェンダーに付加されているイデオロギーが日本語とドイツ語双方の言語においてどのように作用しているのかを問う。

ドイツ語では、フェミニズム運動家(1970年代以降)らによって職業や社会的な役割を表す語において性差を排除するための中立あるいは両性を示す名称が生み出されておりその意義の検証を試みる。生物学的な性差が解消されていたはずの名称に内包されているであろう各ジェンダーに対する規範を考察することにより、名称において性差が明示されることの意義がドイツ語では日本語における性差の明示とは異なっていることを示す。日本語では、性差を示す名称においては生物学的な性差だけではなく社会的に構築され規範化されているジェンダー・イデオロギーが付加されていると指摘されており、名称によって示され顕在化された生物学的な性差以上に男女の差異を個々の内面にフィードバックさせる働きをもつもの(例: 幼女, 主婦など)が存在していると思われる。

日本語、ドイツ語のそれぞれの言語社会の中で使用されている名称によって、その意味内容だけではなく社会的・文化的・歴史的に構築されてきたジェンダー・イデオロギーも共有されていると考えられる。このような名称によってジェンダーが規定されているという考えを示し、両言語において名称に見え隠れしている性差による規範の違いが意味の一部として蓄積されていることを示す。

3. コーパスに基づくドイツ語文形成規則の分析 －方法論的考察と分析結果の中間報告－

在間 進, カン・ミンギョン

本発表では、まず、ドイツ語文形成規則を分析する際の2つの問題点について述べる。その一つは事例の統語的意味的分類に関するものである。分類によって統語的意味的カテゴリーを抽出する場合、本来なら、対象の事例をすべて収集すべきであろうが、実際上、それは不可能である。そのため、一部の事例に基づいて行すが、一部の事例のみに基づく限り、分類は常に「暫定的」になる。もう一つは、データの意味分析に関するものである。目に見える「形」から目に見えない「意味特性(それに基づく意味規則)」を抽出するわけであるが、仮定される意味特性を直接的に証明することが不可能であるため、意味分析も常に「暫定的」ということになる。

次に、以上のような考察から、私たちは、分析結果の暫定性を認めた上での新たな形のドイツ語研究が必要であると考え、「大規模コーパスからの大量データの活用を前提にし、言語使用上の『有用性』を軸にした」方法論を構想するに至ったことを、具体例を示しながら述べる。なお、この方法論では、事例分析に基づく仮説は、ドイツ語の実際の言語使用において有用か否かという観点から検証されることになる。

そして最後に、上述の構想に基づき、私たちが大規模コーパスからの大量データを活用して行ったいくつかの動詞分析の結果の一部を示す。ドイツ語動詞の個別的特性のみならず、ドイツ語動詞の使用に関する一般規則についても触れる。

4. Abenteuer japanisch-deutsche Lexikographie: Das Große japanisch-deutsche Wörterbuch – Voraussetzungen, Entstehung und Potential

Irmela Hijjiya-Kirschnereit, Wolfgang Schlecht

Vermittlung zwischen Kulturen und Gesellschaften basiert auf der Kenntnis der jeweiligen Sprachen, und Wörterbücher sind die wohl wichtigsten praktischen Hilfsmittel bei der Erschließung der fremden Sprache. Die zweisprachige Lexikographie hat also einen besonderen Stellenwert im Bereich der Sprachvermittlung sowie des gegenseitigen Austauschs und der

reziproken Wahrnehmung von Gesellschaften. Ausgehend von diesem Grundgedanken werfen wir ein Schlaglicht auf die Geschichte der japanisch-deutschen Lexikographie und fragen: Weshalb und für wen wird, angesichts von weit mehr als 1.000 schon bestehenden Wörterbüchern und Glossaren im deutsch-japanischen und japanisch-deutschen Bereich überhaupt ein neues Wörterbuch gebraucht?

Die Beschäftigung mit Geschichte und Status quo der japanisch-deutschen Lexikographie bildet zugleich die Folie für Überlegungen zur Praxis der Lexikographie. So stellen wir anschließend die Geschichte, den Entstehungshintergrund und das Konzept des soeben erschienenen Großen japanisch-deutschen Wörterbuchs, Band I, A-I, (Herausgegeben von Jürgen Stalph, Irmela Hijiya-Kirschnereit, Wolfgang Schlecht und Kōji Ueda, München: Iudicium 2009) vor, an dem beide Referenten als Mitherausgeber beteiligt waren. Wir gehen auf die Besonderheiten des Konzepts und die Nutzungsmöglichkeiten aus beiden Richtungen, der deutschen und der japanischen, ein. Unsere These ist, dass dieses neue Werk eine bisher vorhandene Lücke schließt und dass es nicht nur im Bereich der Sprachvermittlung, sondern weit darüber hinaus im wissenschaftlichen, übersetzerischen und Kulturmittler-Alltag neue Möglichkeiten eröffnet.

口頭発表：文学 1 (14:30～17:45) F 会場：2 階 D202 教室

司会：和泉 雅人, 山本 賀代

1. 哲学の危機としての「郵便危機」

ーバッハマン『マーリナ』における「郵便の問題」について

徳永 恭子

インゲボルク・バッハマンの小説『マーリナ』（1971年）には郵便に関するモチーフが散在している。その中でも目をひくのが、「郵便危機」と名付けられたエピソードである。郵便物を配達せずに、自室に保管し続け、罪に問われたある郵便配達人。手紙は執筆され、発送される時間と受取人の所に届く時間が一致しない。この時の不一致・ズレという郵便の最大の特徴が利用され、この「郵便危機」エピソードでは、郵便物の山とともに時が停滞する。バッハマン作品には時が停滞、停止するモチーフが多くあるが、このエピソードもその

一つとして考えられる。

小説の語り手は、この郵便配達人を「思考・意思・存在」を問う哲学者と呼ぶ。ハイデガーは『根拠律』の中で、存在の「根拠」を主体に送付される手紙に喩えた。「郵便危機」とは「哲学の危機」を指し示しているのではないだろうか。デリダもまた哲学者を郵便局に、哲学概念を郵便局から発送される郵便物に喩えつつ、同時に配達の不確実性を強調する。「郵便危機」エピソードの、保管されたままの郵送物の山は、配達の不確実性をまさに体現している。

小説『マーリナ』は、女性の語り手が、自らの理性を体現したドッペルゲンガー、マーリナによって殺されるというストーリーであるが、マーリナが時間の不一致や伝達の不確実性を克服した電話を体現する一方で、語り手は隠された手紙を体現する。配達の不確実性に作者は何をこめたのか。

2. „... ich schreibe Ihnen in höchster Angst und fliegender Eile ...“

—インゲボルク・バッハマンの時間経験について—

前田 佳一

表題はバッハマンの長篇『マーリナ』の語り手「私」が自らの消滅を前にして書き散らすいくつかの手紙からとった。語り手の消滅という極端な帰結へと突き進んでゆくこの長篇に顕著であるように、バッハマンの多くのテキストにおいてはある種の終末論的とも言えるパトスがその動因となる。それはテキストが〈終わり〉という一つの限界（Grenze）をめぐる語り続けているという意味においてである。そして限界とは同時に、ある異領域との境界（Grenze）でもある。それゆえ終末論的テキストは、その異領域との媒介についても暗に語っていると言える。「暗に」と言うのは、それが決して明示されえないからである。ここで言う Grenze（限界／境界）とは最も極端なそれであり、〈終わり〉（限界）の彼岸（ユートピアと呼んでもよいし、神あるいはメシアと呼んでもよい）は、定義上アクセス不可能なものでなければならない。

当発表が目的とするのは、そのような不可能な〈媒介〉に裏打ちされたバッハマンの終末論的時間経験のありようを、「今日」、「非時間（Unzeiten）」等のキーワードを手がかりに定式化することである。扱うテキストは『マーリナ』、『三十歳』、『偶然のための場所』等。ハイデッガーやヴィトゲンシュタイン、ベンヤミン、S・ヴェイユ、J・タウベス、G・アガンベンらとの親和性もまた問題となるだろう。

3. ゴットフリートの『トリスタン』におけるリヴァリーンと ブランシェフルールのミンネ

田中 一嘉

13世紀初頭にゴットフリート・フォン・シュトラースブルクが執筆した『トリスタン』における「ミンネ（愛・恋愛：minne）」について、ミンネという現象が社会的・道徳的前提、いわゆる宮廷的「名誉（*ére*）」と密接に関連しているという観点から、作中でどのように理想のミンネ世界と現実社会とが対置・独立もしくは融合しているのかが議論の中心となっている。これらの議論では主として詩人のコメンタリーである「付論（Exkurse）」と主人公トリスタンとイゾルデの物語である本史との比較によってミンネが考察されてきたが、トリスタンの両親リヴァリーンとブランシェフルールの物語について言及している研究は少ない。

本発表ではプロローグと本史との間に位置するこの前史が、トリスタンが出生するまでの単なる挿話ではなく、すでにプロローグで呈示されている幾分抽象的なミンネ観が前史におけるリヴァリーンとブランシェフルールの人生を通して具象的に展開されていることを認め、『トリスタン』全体にとって重要な箇所であると位置づける。その際、ミンネと宮廷的「名誉」の相互的な不可侵性を読み取り、外的要因＝宮廷社会との関連は彼らのミンネにとって大きな影響を及ぼしたのではなく、彼らのミンネが彼らの内でどのように内的な発展をし、そして結実していったかを明示したい。また、補足的にトリスタンとイゾルデの本史を含めた作品全体との比較も行い、プロローグから前史に至るミンネ観が本史においても貫かれている可能性についても検討したいと思う。

4. エーリヒ・ケストナーのカバレット作品における他の作家の作品への諷刺的 表現に関する考察

高坂 朋子

児童文学作家や詩人として有名なケストナーは、一方でカバレットの作家としても多くの作品を残しており、ベルリンのカバレット *Die Katakombe*、ミュンヘンのカバレット *Die Schaubude* や *Die Kleine Freiheit* にその作品を提供した。本発表ではそのカバレット作品の中から諷刺劇の先駆者とも言われている *Aristophanes* の同題作品を題材にした „*Die Acharner*“ (1951)、ケストナーと同時代の劇作家である *Carl Zuckmayer* の同名作品を題材にした „*Der Hauptmann von Köpenick*“ (1953)、同じく同時代人 *Brecht* の „*Das Lied vom*

Surabaya-Johnny“を題材にした„Surabaya-Johnny II“（1930）を例にあげ、他作家の作品を改作することによってその作品と作家への評価と批判を自らの作品に盛り込む表現をしたケストナーの諷刺性について検証する。

先行研究として、既存のケストナーのカバレット研究について総括的に論じている Wittenberg の研究報告 „Erich Kästner und das Kabarett—ein Forschungsbericht“（2004）や Herchenröder の小論 „Gutes Kabarett in schlechter Zeit. Was Erich Kästner dafür tat.“（1983）等があるが、個々のカバレット作品に対する精緻な研究は未だ発展途上の段階にある。本発表では、特に Wittenberg の報告を参考にしながら、カバレットにおけるケストナーの諷刺表現の特徴と、そのなかにおける他作家が書いた作品に対するケストナーの諷刺的改作の意図に着目する。また、題材とした作品とケストナー作品を比較することによって、ケストナーのカバレット作品の独自性と時代諷刺の捉え方の特異性を探る。

5. 〈奇跡〉と〈善〉の短篇『トンカ』

—ミュージル文学における「道徳的空想」の概念—

清原 明代

ミュージルの短篇小説『トンカ』（1922年）の主人公は、その本質が「善」であるとされる一対の男女である。語り手によって「彼」と呼ばれる男性の恋人、トンカが妊娠する。しかしその受胎は「彼」が旅行で不在の間になされていることが判明して以来、「彼」は、トンカの潔白を信じるか、それとも彼女が不義をはたらいたと考えるか、という二つの立場の間で揺れ動くことになる。（現実）と〈可能性〉という二つの領域の拮抗と、それを体験する人間の精神的変容は、ミュージル文学の主題の一つである。『トンカ』はこうしたミュージル的な特徴を明確に示しているが、同時に次の点も看過してはならない。この作品を動かす主要な〈出来事〉はトンカの妊娠であるが、これはトンカの潔白を信じる限り（現実）には起こり得ないこと、つまり〈奇跡〉である。観念としてではなく、〈現実〉に介入した〈奇跡〉を直接示唆しているという意味において、『トンカ』は他のミュージルの代表作よりも空想的な性質の作品である。本発表では、どちらかと言うと非現実的／虚構的な要素としてあまり積極的に顧みられてこなかったこの空想性こそが、作品『トンカ』の形式的側面の主題を構成していると考ええる。その上で、内容的側面の主題として、主人公たちの本質とされる〈善〉なる性質に着目するとき、のちに『特性のない男』（1930-52年）において「道徳的空想」という語で表現される概念の先駆体が、『トンカ』の作品の精神とし

てすでに立ち上がっていたことが明らかになるのである。

口頭発表：文化・社会 1 (14:30～17:05) G 会場：2 階 D203 教室

司会：Mechthild Duppel-Takayama, 岩下 真好

1. グリム、ベヒシュタインからマーラー《嘆きの歌》へ —テキスト改変の起点としての作品論—

山本まり子

グスタフ・マーラー作曲《嘆きの歌》(1880年初稿完成)の歌詞テキストは、グリム・メルヒェンの「歌う骨」(KHM28)およびベヒシュタインの『新ドイツ・メルヒェン集』の「嘆きの歌」を下敷きにして作曲者自身が書き下ろしたものである。本発表では、マーラーがこれらの題材をどのように扱ったのかを検証する。テキストの改変は、マーラーの音楽創作において顕著な特徴であり、後の『少年の魔法の角笛』に基づく歌曲群では原詩が大幅に改作されていることが広く知られている。発表者はこれまで学位論文等で《角笛》歌曲群を扱ってきたが、初期作品の《嘆きの歌》を起点として系統的に考察することによって、彼の音楽創作の過程と声楽作品に見られる本質的な特徴を明らかにすることを狙いとしている。

《嘆きの歌》に関する一次資料は、2部構成による改訂版(1978年)と3部構成の初稿(1999年)の2種類の批判校訂版楽譜作成の過程でかなり整理された。また、この作品のテキストをドイツ文学・文献学の対象とした研究も進展を見せている。本発表ではこれらの先行研究に依拠しながら、グリム/ベヒシュタインとマーラーのテキストの異同を検証することによって、次の諸点を浮き彫りにしたい。a)マーラーはグリムとベヒシュタインのテキストから物語の骨子とその幻想性を受け継いだ。b)マーラーの作品の主要舞台である「自然」の表現様式が確立した。c)伝承文芸への傾倒が明確に現れている点で、その後の創作手法を決定づけた。

2. ベートーヴェン《第9》解釈の系譜—ハインリヒ・シェンカーを中心に—

西田 紘子

本発表の目的は、ベートーヴェンの《第9》交響曲がどのように解釈されてきたかについて、19世紀後半から20世紀前半のドイツ語圏における音楽家—H. リーマン, H. クレッチュマー, G. グローヴ, F. ヴァインガルトナー, H. シェンカー—の著述を年代順に辿り、その系譜の一端を明らかにすることである。

各々の解釈が拠って立つ価値観や前提などの歴史の変遷が辿られたことはほとんどなく、音楽作品を一つの物語によって説明する傾向を主題化した研究も近年、緒についたところである。そのようななか、シェンカーの作品論については、彼の有機的作品観が物語論の分野から考察し得ることが指摘されている。したがって、シェンカーを立脚点としつつ、彼が批判を浴びせた前代の音楽著述家たちの解釈にも目配りをすることによって、《第9》解釈史の一段面を切り取ることができるだろう。

シェンカーは、前代の著述家たちが音楽外の物語に則って作品を解釈することを批判し、そのうえで音楽そのものの物語を構築しようとした。音楽的事象そのものに特化したこのような専門的な批判は、19世紀に誕生した演奏会用プログラム・ノートという大衆的な媒体に対する反動として捉えられる。他方、彼らの作品解釈にみられる物語性について考察することで、歴史・文学など他分野における物語論との接点を示したい。

3. パイロイトのドイツ・ロマン主義に関する研究

ージャン・パウルの理想郷からー

川西 孝男

パイロイトのロマン主義として、まず思い浮かぶのはリヒャルト・ヴァーグナーの芸術とその思想である。このヴァーグナー以前の18世紀末から19世紀初頭にかけてドイツ・ロマン主義の文豪ジャン・パウルが当地で活躍していたことはあまり知られていない。

また、ゲーテとほぼ同時代を生きたが、「ゲーテをも凌ぐ。まったく新しい」との称賛に対し、「読み手のことを考えていない」「形式や統一性がない」とも指摘される。このように評価は大きく分かれるが、ジャン・パウルはその博識によって王室や知識人たちとも交流し、ドイツ・ロマン主義の代表的作曲家マーラーらも彼の長編小説に傾倒していた。

しかしながら、ジャン・パウルはドイツ・ロマン主義の傍流とされ、次第に忘れ去られており、彼が生涯の大半を過ごしたパイロイトの歴史文化との関わりといった視点に踏み込んだものは少ない。

本発表では当時のパイロイト領邦とジャン・パウルに焦点を当て、小説に描かれたエリュエシオン、ヘスペリーデンといった、彼の“理想郷”を探求するとともに、ヴァグネリアンでもあるマーラーが交響曲に描いた“ジャン・パウルの世界”からパイロイトの地に栄えたロマン主義に言及する。

ジャン・パウルを再考することによって、パイロイトにはヴァーグナー芸術をも根付かせたロマン主義の大きな源流があり、これらはナチス時代に主張さ

れた民族主義、全体主義などと全く異なったものであったことに及びたい。

4. 映画・自殺・ヒトラー—ハンス=ユルゲン・ジーバーベルク

『ヒトラー、ドイツ生まれの映画』について

荒井 泰

ハンス=ユルゲン・ジーバーベルク（1935- ）の『ヒトラー、ドイツ生まれの映画』*Hitler, ein Film aus Deutschland*（1977）は、文字通り、ヒトラーがドイツの文化から生まれた「映画」だという認識を前提としている。だがここでいう「映画」とは何か。この言葉は「スペクタクル」（ソントグ）や「イメージ」（ドゥルーズ）などの言葉で置き換えられ、漠然と理解されているだけで、いまだそれ自体は十分に考察されていない。本発表では、ジーバーベルクのエッセイをも参照しながらこの映像作品を分析し、「映画」という言葉に輪郭を与えてみたい。

作品中、基本的にヒトラーは「死者」もしくは「操り人形」の姿をとって現れる。この演出から、「虚構の存在」としてのヒトラーを描くというジーバーベルクの意図が窺える。そしてヒトラーの台詞「ヒトラーはドイツである」や、ジーバーベルクが他所で使う「ヒトラーはドイツの姿をとって自殺を遂げた」という表現は、この作品が、ヒトラーと「国家」との同一化の問題をも視野に入れていることを示す。つまりここで「映画」とは単なる表現技術ではなく、そのような「虚構の存在」と関わる文化装置と考えられる。

したがってヒトラーとは、ドイツ国民の「秘匿された願望」が投影されるスクリーンにしてその投影像だったことがわかる。ジーバーベルクがこの作品で扱うのは、権力をも含む広義の文化現象（虚構）が映し出されるために必要な「映画」という装置であり、その虚構に同一化してしまった一人の男の狂気である。

ポスター発表 (13:00~14:30) H会場：地下1階 コミュニケーション・ラウンジ
(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

• **Wie wirken E-Mails japanischer Deutschlernender auf deutsche Muttersprachler?**

Axel Harting

Texte japanischer Deutschlernender wirken auf deutsche Muttersprachler oft befremdlich, wenn sie nicht den Schreibkonventionen deutscher Textsorten entsprechen. Besonders heikel ist die Realisierung von Sprachhandlungen wie Entschuldigungen oder Bitten, da dadurch das persönliche Verhältnis zwischen dem Schreiber und dem Leser potentiell gefährdet wird. In Anlehnung an Goldschmidt (1995) und Hartford (1996) wurde für die vorliegende Untersuchung ein Korpus mit 40 E-Mail-Bitten japanischer Deutschlernender erstellt. Zur Bestimmung sprachlicher Mängel wurden diese auf Basis von Erkenntnissen von Kleppin (1997) und Schmidt (1994) einer Fehleranalyse unterzogen. Um darüber hinaus Aussagen treffen zu können, welche der ermittelten Normabweichungen von Muttersprachlern als irritierend empfunden werden, wurden zur Beurteilung der E-Mails 20 Rater eingesetzt.

Als Ergebnis ging hervor, dass mit steigendem Sprachniveau der Lernenden deren E-Mails als höflicher, ansprechender und freundlicher eingeschätzt wurden. Bemängelt wurde die falsche Verwendung von Inhalts- und Funktionswörtern sowie Fehlgriffe in Bezug auf Höflichkeit. Als weniger störend wurden Rechtschreib- und Interpunktionsfehler, falsche Wortendungen und Fehler bei der Wortstellung empfunden. Inhaltlich vermissten die Rater vor allem Ausdrücke des Danks, Anreden und Schlussgrüße. Diese und andere im Rahmen dieser Studie gewonnenen Erkenntnisse können DaF-Lehrenden in Japan Anregungen geben, wie sie die Lernenden unterstützen können, E-Mails zu schreiben, die zielsprachlichen Textkonventionen und muttersprachlichen Leseerwartungen entsprechen.

• **Die Rolle der kritischen Reflexion über das eigene Lehrverhalten im Fremdsprachenunterricht - eine Projektvorstellung und eine methodische Diskussion**

石塚 泉美

In diesem Beitrag soll ein laufendes Dissertationsprojekt zu Lehr- und Lernvorgängen im Konversationsunterricht präsentiert werden.

In dieser Studie wird neben dem von außen beobachtbaren Handeln im Unterricht insbesondere auf die diesem Handeln zugrundeliegenden individuellen kognitiven Strukturen großer Wert gelegt. Die wesentlichen Fragen dabei lauten:

- Welche Einstellungen und Meinungen besitzen die angehenden Lehrer (Praktikanten, Tutoren) in Bezug auf Fremdsprachenunterricht?
- Wie verhalten sie sich aufgrund dieser Einstellungen und Meinungen als Tutoren im Unterricht?
- Wie nehmen die Lerner dieses Geschehen wahr?

Um die komplexen Forschungsgegenstände detailliert, ganzheitlich und kontextbezogen analysieren zu können, wurden/werden verschiedene Methoden (Unterrichtsbeobachtung, Interviews, Fragebögen) kombiniert. Für die Auswertung wurden die Verfahren der qualitativen Inhaltsanalyse und des thematischen Kodierens eingesetzt. Dabei soll auf den Unterrichts- und Interviewtranskripten basierend versucht werden, „praktische Theorien“ zu entwickeln.

In dem Beitrag sollen u.a. einige Beispiele vorgestellt werden, die nach dem derzeitigen Stand der Forschung besonders für den kommunikativ orientierten Deutschunterricht relevant erscheinen. Anhand dieser konkreten Daten soll zur Diskussion gestellt werden, ob und inwieweit angehende muttersprachliche Deutschlehrer durch kritische Reflexion ihres eigenen Lehrverhaltens im Unterricht neue Einsichten über das Lehren und Lernen

gewinnen können und wie die Lerner dies wahrnehmen.

In qualitativer Forschung ist von entscheidender Bedeutung, nicht nur die (vorläufigen) Ergebnisse sondern die Verfahren und sogar die ursprünglichen Fragestellungen im Laufe des Forschungsprozesses immer wieder kritisch zu reflektieren und, wenn nötig, zu revidieren. In diesem Sinne erhoffe ich mir, in einer intensiven Diskussion mit den Zuhörern Anregungen und Hinweise für die weitere Forschung erhalten zu können.

- **Sprachlernmotivationsbiographien**

Julia Christine Schaaf

Schriftliche Sprachlernmotivationsbiographien bieten die Möglichkeit, das Fremdsprachenlernen aus der Perspektive der LernerInnen zu betrachten. Im Gegensatz zu vorformulierten Fragebögen, wo bestimmte Themen vorgegeben sind, können die TeilnehmerInnen bei dieser offenen Frageform eigene Schwerpunkte setzen, die ihnen bei Betrachtung ihrer bisherigen Fremdsprachenlernerfahrungen wichtig erscheinen. Dabei sollen sie neben Deutsch auch andere bisher gelernte Fremdsprachen, in der Regel Englisch, berücksichtigen und auf ihre Motive und Motivationen, Ängste und (Miss-)Erfolgserlebnisse eingehen.

Es werden Sprachlernmotivationsbiographien von DeutschlernerInnen vorgestellt und analysiert, die Deutsch im Wahlpflichtbereich an einer privaten Universität in Westjapan lernen. Die Datenanalyse erfolgt nach der von Riemer 2005 beschriebenen Kategoriengewinnung.

Für die Lehrenden bieten diese Befragungen wichtige Hinweise zur Unterrichtsgestaltung. Es werden Ansatzmöglichkeiten aufgezeigt, die genannten Punkte in den Unterricht einzubeziehen und ihn somit lernerzentrierter zu gestalten.

・ **Leben in und gegen die Diktatur - Wie die Menschen die Diktatur ignorierten -**

Frank Riesner

Während bei der Bewertung der historischen Bedeutung des Mauerfalls und der darauf folgenden Wiedervereinigung meist Massendemonstrationen im Jahre 1989 thematisiert werden, sollte jedoch den Oppositionsbewegungen in den 80er Jahren mehr Aufmerksamkeit gewidmet werden, weil da die Schwächen der SED-Diktatur aufgezeigt wurden und öffentliche Kritik am System möglich gemacht wurde.

In dieser Posterpräsentation möchte ich die Etappen des Widerstandes gegen die Diktatur in der DDR zeigen und seine wichtigsten Vertreter vorstellen. Über die Proteste von 1953 und von 1968 hinaus möchte ich besonders auf die Protestierenden der 80er Jahren aufmerksam machen. Diese unbeugsamen Menschen riskierten ihre berufliche Karriere, nahmen Haft und Ausgrenzung in Kauf und blieben dennoch in der DDR, um ihren Kampf fortzusetzen. Anders als Demonstranten und Widerständler der 50er Jahre konnten diese Oppositionellen die DDR nicht einfach verlassen, wenn es zu gefährlich wurde. Aus eigenen Erfahrungen möchte ich als ehemaliger DDR-Bürger schildern, welche Möglichkeiten ich selbst zum Widerstand hatte und wo die Grenzen für mich lagen.

・ **宗教改革時代における印刷ビラー読み聞かせのコミュニケーションー**

芹澤 円

16世紀前半のドイツにおいて、「印刷ビラ」(Flugblatt)というメディアが普及した。ある統計調査によれば、1518年から1523年の間に、印刷ビラの数はいくつかの点を越えていたという。印刷ビラは小型で軽くて持ち運びやすく、書籍の行商は街角などでも簡単に販売することができた。宗教改革派は、カトリック教会の腐敗を糾弾し、宗教改革の思想を広めるための重要なメディアとして、この印刷ビラを利用した。

識字率が5パーセント程度にすぎなかった「声の文化」(オング 1991)の時

代にあって、印刷ビラは「読み聴かせ」(Vorlesen)という形によって民衆の耳に届けられた。その際、読み聞かせにより伝えられる内容が効果的に聞き手の心に伝わるように、木版画を用いた図像の情報とテキストを用いた言語的信息という両面で、工夫がなされた。ビラの内容に沿った挿し絵は、文字の読めない民衆に対し、視覚情報からの印刷ビラ理解を促した。言語面に関しては、印刷ビラの制作者たちは、脚韻を使用することで聞き手にとって聴きやすい文章とするのみならず、メタファー、誇張法、対比法、冗語法、矛盾語法などを用いて、「上手い弁論のわざ」であるレトリックの手法を駆使した。

本発表では、実際に宗教改革派が発信した印刷ビラを例として示し、具体的にどのような図像的信息と言語的信息の提示によって、印刷ビラの読み聞かせが効果的に行われたかを例証する。

・ドイツにおけるトルコ系移民の若者のことばー„Kanak Sprak“の言語的特徴

田中 翔太

Kanake というドイツ語は、本来ポリネシア語の *kanaka* に由来する。19世紀にはポジティブな意味合いを持っていたこの語は、1970年代からは、ドイツに押し寄せた外国人労働者に対して使う、差別的な用語へと意味変化した。そして1995年に、フェリドゥン・ザイモグルは著書『カナークの言葉：社会の周縁の24の雑音』のなかで、トルコ系移民が話す言語変種に「カナークの言葉」(„Kanak Sprak“)という名称を与えた。ここで言う„Kanak Sprak“とは、「間違った母語の話し方しかできず、ドイツ語も条件付きでしか流暢には話せない」人々の言語である。しかしこの言葉は1990年代半ば頃からコメディアンやヒップホップの世界で好んで用いられ、2000年代に入ると cool な言語として注目され始めた。つまり、今日„Kanak Sprak“がポジティブな意味で使用されるのは、メディアの影響が大きい。その意味において、„Kanak Sprak“はザイモグルの定義を離れて、メディアにより様式化された言語に変化したとすることができる。ただしこの言語は、ドイツ語の若者ことばとの重なりも多く、この両者に境界線を引くことの困難さが予見される。

本ポスター発表では、以上の背景を持つ„Kanak Sprak“がどのような言語的特徴をもつ言語変種であると見なせばよいのかについて、„Kanak Sprak“で書かれた資料をもとに分析を行う。

・グリム『ドイツ伝説集』における配列と四大要素

植 朗子

19世紀初頭にグリム兄弟によって出版された『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen*は、ドイツ民俗学の礎石として位置付けられている作品のひとつである。グリム兄弟は、彼らが蒐集した膨大な数の伝説の中から、『ドイツ伝説集』に収録する伝説各話を抽出し配列を試みた。それまでの伝説集の配列は、地域ごとによる分類・年代順・怪異を起こす「異界の住人」の名称ごとの分類が一般的な形式であった。しかし、『ドイツ伝説集』の編纂形式は、従来の方法とは異なるものであり、グリム兄弟は周到にその配列を行ったものと思われる。

それにもかかわらず、『ドイツ伝説集』の配列論を取り扱ったものは、少なくともわが国の先行研究においては見当たらない。伝説配列を論じるために、本発表では、まず伝説区分の基準を明らかにした。グリム兄弟は、『ドイツ伝説集』の序文において、伝説の区分方法が多岐に渡っていることを示唆している。そこで、伝説各話に登場する怪異体の属性を伝説の舞台や小道具から、四大要素（土・火・水・気）のグループに分類し、前後の話のつながりを調べた。伝説の結末は不完全なものが多くあるが、『ドイツ伝説集』の配列から浮かび上がる伝説群は、互いの内容を補完し合う機能を持っている。グリム兄弟の配列意図を探ることによって、『ドイツ伝説集』の編纂によって表現しようとした彼らの宇宙観について明らかにしたい。

第 2 日 5 月 30 日 (日)

シンポジウムⅣ (10:00~13:00) D 会場 : 2 階 D203 教室

心態詞の音声と意味 : 新しい研究手法の開発にむけて

Aussprache und Bedeutung der Modalpartikeln: Zur Entwicklung neuer Untersuchungsmethoden

司会 : 岡本 順治, Angelika Werner

従来、心態詞 (Modalpartikel, 以下 MP) の意味と機能は、特に発話行為や会話・談話分析といった観点から検討されてきた。最近では、意味最少主義あるいは文法化理論といった、その時々のアプローチによる意味解釈も試みられたものの、実証的研究の方法が確立されているとは言い難い。そこで本シンポジウムでは、先行研究から発展した新たな実証的研究手法による MP の音声と意味についての研究可能性を 4 名のパネリストが報告する。

先行研究における MP の記述は、研究者の母語話者としての直感によるものが多く、実験的手法を用いた発話の分析はこれまでほとんどなされていない。生駒/Werner 報告は、発話音声を用いて schon の実験音声学的分析を行い、その韻律的特徴と意味・機能との関わりを客観的に明らかにする。牛山報告は、言語習得から見た MP を扱う。これまでドイツ語母語話者の言語習得プロセスの中で MP を中心に扱った研究は皆無だった。巨大な幼児の発話コーパスを利用することで、そもそもいつ幼児は様々なタイプの MP を習得し使うようになるのかを、認知的な発達面と言語使用の相互作用を考慮して考察する。今回は特に、命令文中の doch がいつどのような形で出現するかを明らかにする。

筒井報告は、心態詞の中でいまだ漠然としか扱われていない mal に注目し、行為指示型 (Direktiva) の発話で使用される際の mal の意味・機能を明らかにする。話し手が聞き手との間に存在すると想定する知識に基づく信念をてがかりに MP の mal の意味を再考する。これまでの研究では、話し手から聞き手への要求する内容の些事性や、心理的負担の大きさといった点についてはあまり扱われてこなかった。この要求内容の些事性と mal の関係を検証する。岡本報告は、穴埋めテスト、4 コマ画、ビデオを使った産出テストという実験的な試みを通じて、MP の持つ「間主観的な意味」の状況依存性を検証する。コミュ

ニケーションの概念には、話し手が聞き手に対して抱く信念や感情の共有が、一定の役割を果たしている。この考え方に基づいて行われる産出テストを用いることで、ドイツ語母語話者が、状況の中でいかに心態詞を補って発話するかが焦点となる。

従来から行われてきた直感的な MP の意味・機能の把握を越えて、MP 研究は、今後より実証的研究へ向かわなければならない。今回のシンポジウムは、その方向を目指して行われるものであり、多くのディスカッションにより、より洗練された実証方法を確立するきっかけとなることが期待される。

1. schon の韻律的特徴と意味・機能

Prosodie und Bedeutung der Partikel *schon*

生駒 美喜, Angelika Werner

schon は話し言葉で多く用いられ、様々な意味・機能を表す。先行研究によると、平叙文に現れる *schon* には 1) 確信 (Zuversicht), 2) 制限付きの肯定 (Einschränkung), 3) 反論 (Widerspruch) という心態詞としての意味の他、時を表す副詞 (Temporal) としての機能がある。心態詞 *schon* にはアクセントがある場合とない場合があるが、先行研究における記述は研究者の母語話者としての直感によるものが多く、実験的手法を用いた *schon* の発話の分析はこれまでほとんどなされていない。音声データを用いて客観的な分析を行い、*schon* の韻律的特徴と意味・機能とのかかわりを明らかにしていくことが、ドイツ語教育の観点からも重要であろう。

本研究では、*schon* の発話音声を用いて *schon* の分析を行い、その韻律的特徴と意味・機能との関わりを明らかにすることを目的とする。これまで行った分析の結果、アクセントの有無のみでなく、*schon* を含む発話全体においてそれぞれ異なる韻律的特徴があることが明らかとなった。Zuversicht, Widerspruch, Temporal においては *schon* にはアクセントがないが、F0 (基本周波数)、持続時間、強さは異なる特徴を示した。さらに母語話者による知覚実験を行った結果、Zuversicht と Widerspruch の発話を除き、*schon* の発話のみでほぼ 100% 正しく意味が識別されることがわかった。一方、対話データの分析の結果、驚き (Überraschung) と確認 (Bestätigung) の機能があることが明らかになった。この結果を踏まえ、さらに発話実験を行い、Zuversicht,

Einschränkung, Widerspruch, Temporal, Überraschung, Bestätigungの意味・機能について韻律的特徴を明らかにすることを試みる。

2. 幼児はどのようにして命令文の中で doch を使うようになるか？

牛山 さおり

幼児の発話には、話し手から聞き手への要求を表す„Milch!“, „Mama, rein!“といった1語, 2語文が, 1歳~1歳半頃から確認され始める。このような表現と並行する形で動詞が使用され始め, 動詞第二位, 疑問文や命令文といった文型が習得されていくことが予測される。

月齢に沿った一般的な認知能力の発達, 自分の意図を伝える言語手段を多様化させると考えられるが, 話し言葉に多用される心態詞を分析対象とするのは, 心態詞が話し手と聞き手の間でやり取りされる知識や信念を確認するために使われるという特徴を持つからである。

本研究では幼児言語データ交換システムCHILDESを使い, ドイツ語を母語とする幼児3名の1歳半から7歳までの発話データを分析することで, どのように幼児は命令文を習得し, 命令文の中で心態詞dochを用いるようになるかを考察する。これまでの研究から, 返答詞としての使用が1歳10カ月前後で確認されて4~8ヶ月の間に平叙文での使用が, そして3歳頃から命令文においても使用が開始される傾向が見られた。ただし, 必ずしも動詞第2位の使用よりも後に心態詞が出現すると断言することは出来なかった。

そこで本発表では, 要求を表現する文にまで対象を拡大し, sollen, müssen, wollenといった助動詞, 相手への要求に用いられる数種類の心態詞(eben, mal, ruhig, schon)がどのように出現していくのかも論じることで, 命令文の発話内容が月齢に応じてどのように変化していくのかにも着目する。

3. 心態詞 mal の意味・機能—話し手・聞き手の信念を手がかりに—

筒井 友弥

心態詞の意味・機能に関する議論は, 依然として多様である。本発表では, 心態詞の中でいまだ漠然としか扱われていない mal に注目し, 行為指示型(Direktiva)の発話で使用される際の mal の意味・機能を再考する。その際, 「心

態詞の意味は、[...] 話し手が聞き手との間に存在すると想定する知識に基づく信念と発話状況を参照し、聞き手に向かっているところにその特徴がある」(岡本 2010)として捉え、話し手は聞き手の信念の同調を求めるものとする。先行研究によれば、心態詞 *mal* は「要求の強制力の緩和」という意味・機能をもち、特に相手が親しい間柄(家族・友人・同僚など)で(cf. 板山 1988; 1992; Werner 2002; Tsutsui 2006)、かつ要求の内容が、聞き手による実行に対して反復の可能性を内在するような些事(*beiläufig*)である場合に使用される傾向が強い(*mal*はその事象の反復可能性を制限する)。しかし、要求内容が些事であることと、その場合に肯定的に使用される心態詞 *mal* との関係については、これまでほとんど扱われていない。そこで、話し手と聞き手の信念の同調という観点に着目し、心態詞 *mal* が心理的な弊害を伴わず適切に使用されるために、*mal* が非明示的に表す些事性を話し手がどのように想定し、聞き手の「実行能力の見込み」(Bublitz 2003)と関係づけるかを論じる。

4. 心態詞を使った発話の意味を実験的に捉える試み

岡本 順治

心態詞の意味を捉えようとするこれまでの研究では、心態詞の意味を話法と関連づけ、話し手の心的態度(*Sprechereinstellung*)にあるとするアプローチや、エピステミックな意味の次元を想定するもの、関連性理論からの説明を目指す研究、話法の拡張から特徴づけを試みるものなどがあるが、それらの研究が参照するデータは、文、あるいは(実際の)会話の断片を解釈するものが中心だった。

それに対して、本発表では、岡本(2010)に示された心態詞の「間主観的な意味」が発話状況と特定の知識を前提しているという考え方にに基づき、産出(*Produktion*)の面から心態詞の意味を(部分的に)捉えることができることを示す。産出テストにも、さまざまな制約があるが、従来の言語学者の直感的判断では分からなかった側面を捉えられる可能性がある。特に、実証的データを会話コーパス等に求める場合には、否定的証拠が得られないが、産出テストでは、間接的に否定的証拠が得られ、テスト後にプロトコルを取ることによって、それが明確になる。

今回紹介する産出テストは、(1) 穴埋めテスト、(2) 4 コマ画を用いたテスト、

(3) ビデオにより発話状況を作りそれに応答してもらうテストの 3 種類である。これらの実験では、ドイツ語母語話者が、状況の中でいかに心態詞を補って発話するかを検証する。

シンポジウム V (10:00~13:00) C 会場 : 2 階 D202 教室

アーカイヴの思想をめぐって

Über die Philosophie des Archivs

司会 : 糸川麻里生

様々な文化現象や文化的産出物を「集合的記憶」のメディアとして理解しようとする「文化的記憶」研究の試みは、ヤンとアライダのアスマン夫妻(Jan & Aleida Assmann)を中心に、1990 年代以降のドイツ語圏でさわめて生産的な研究ジャンルであり続けてきた。その影響は東アジアや北米の人文学諸分野にも及び、集合的記憶と多様なメディアをめぐる問題設定は各文化圏にとって文化、歴史、政治の領域を横断するものとして高いアクチュアリティを持ち続けている。一方でここ 20 年ほどの間に著しい発展を見せたメディア研究、文化学(Kulturwissenschaft)、そしてこれらに強いインスピレーションを与え続けてきたヴァルター・ベンヤミンの手になるテキスト研究の成果と結びついて、「文化的記憶」はひとつの研究ジャンルとして確立された観がある。

本シンポジウムにおいては、この文化的記憶研究の文脈を踏まえつつ、「アーカイヴ」という記憶装置をめぐって、絵画、筆跡、インスタレーションなど文学テキスト以外の様々な芸術作品をも話題に上らせながら議論をしてみたい。アーカイヴとは、最も狭義においては「公文書館」のことである。太古から、また洋の東西を問わず、保管された公文書こそは強大な国家権力の正当性の証であった。ごく限られた数の文明圏から文字が生み出された背景には、きわめて広範囲において複数の民族を支配する巨大権力があつたのである。そのような権力は「神」的存在に対して文字によって自らの支配の正統性を表現する必要があつた。一方、近現代においては、「アーカイヴ」はもはや巨大権力だけのものではない。様々な文化的記憶が、資料としての文書や物品の蒐集によって保持され、生み出されている。国家権力とは直接関係を持たない民間レベルにおいても、芸術家や歴史的事件などについて、さまざまな遺物や痕跡が集められてアーカイヴ化されている。しかし、どのような小さなアーカイヴでも、そ

れが権力の正当性を支える唯一の根拠であることには今も昔も変わりはない。いわば、大小様々なアーカイヴにおいてこそ、権力行為としての政治は行なわれているのである。

アーカイヴは、体系化された知の集合としての「図書館」ではなく、分類体系によって意味づけされた物品がならぶ「博物館」でもない。いまだ何者でもない蒐集物が、あるゲシュタルトもしくは根源のもとに集まり来たり、「神」の権力を継承しようとする装置なのだ。そのような権力装置としてのアーカイヴをめぐって多角度から意見が交換されることを期待している。

1. ヴァルター・ベンヤミンの美術論と歴史的時空間の検索術

松井 尚興

文化は模倣を通じて築かれる。未熟なまねごとが彌縫され集積する。取り繕われたその縫目を、ベンヤミンの筆は切り開く。彼は視覚文化の中に、輪郭を模する素描と、瞳や頬が色づくという受動的な模倣の分裂を見出し、それを線描図 *Graphik* と絵画 *Malerei*、また（他言語に翻訳困難な）徴 *Zeichen* と斑 *Mal* の区別に結びつけた。壁に掛ける絵画と比べて、線描図は水平面に馴染みが深く（地面の落書き、境界線、画工や画商の机）、その描線は、カインの徴が罪人を集団から分けるように紙面を区切る。一方、聖痕や病者の斑紋は宗教的図像伝統の中で、個の意志を超えて〈負い目〉を伝染させる。そんな斑の彩りの暗示にかかって、描かれた個物の名や価値を見誤ったり、また、徴によって行く手を遮られたりせずに、集団間の閾を跨いで両面を時空間に立体化できないか。そう問う彼は、『ベルリンの幼年時代』でも徴と斑の裂け目を辿り、店舗となった元邸宅の階段で飾り窓の色にてらして、勤労の功德を彩る詩句の記憶を洗い直した。だが、徴と斑は写真のハーフトーンの中では癒合し、彼に一見翻訳不要の幻惑的な吐息 *Aura* を通わせてしまう。そこで、その光化学的模倣機序を乱す「ショック」が彼の写真検索ツールとなった。『親和力』論でも彼は、〈光〉の寡黙な化学的絵姿のアウラに幻惑され続けるが、作中挿話の〈電撃〉の力を借りて、小説中の情景描写に潜む胡散臭い縫合線や染みを辛うじて探り当てている。

2. 舗装道路と「印刷された問題 (printed matter)」

－アーカイヴ・モデルとしての芸術作品－

上崎 千

写真を繋ぎ合わせることで用意された二つのイメージの系列が、互いに逆さまの向きで横たえられている。この作品で試されているシークエンスの質は、順序が予め定められた「全ての」モチーフの、取捨選択のない機械的な並列によって特徴付けられる。蛇腹状に折りたたまれ、広げると約 27 フィート (823 cm) にもなるこの『Every Building on the Sunset Strip』(1966) は、ある種の網羅性の表現であり、ルシェー (Ed Ruscha, 1937-) が「印刷物」によって示したアーカイヴ・モデルである。モダニズムの最後尾から出発するルシェーは、アーカイヴ的なオーダーに向けられた彼の関心を「印刷された問題」として実現する。この「印刷された問題」という語、あるいは端的に「印刷物」という語を使用する際、念頭におかれているのはスミツソン (Robert Smithson, 1938-73) の次の言葉である。「私が言語と言うとき、それは物質＝問題 (matter) であって、いかなる観念でもない。つまり、『印刷物＝印刷された問題 (printed matter)』のそれだ (1972)。」出来事の舞台なき劇場としてのアーカイヴを、ルシェーは記録／表現の界面においてレイアウトする。ルシェーが「印刷物＝印刷された問題」として舗装し直したサンセット・ストリップを検証し、『Every Building on the Sunset Strip』の経験を〈アーカイヴ的思考〉のドライブとして位置づけることが、本発表の課題である。

3. 筆跡というインデックス

－世紀転換期における手書き文字コレクションと筆跡学

遠藤 浩介

本発表の課題は、分類の妥当性をめぐる議論とアーカイヴの設計の関係を、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての手書き文字コレクションに即して考察することにある。具体的には、ハンス・シュナイケルトが提案したベルリン警察のコレクションの設計思想を検討しつつ、これらのアーカイヴにおける分類設計の変化とその要因を考察する。

ベルリン警察の鑑識部門責任者であるハンス・シュナイケルトの提唱によって設立されたコレクションでは、手書き文字はまず筆跡の視覚的特徴に従って 54 のグループに分類され、収集した日付順に番号が与えられていた。そしてこのコレクションには、犯罪者の名前が分かっている場合にも対応できるよう、

個々の筆跡の特徴と書き手の名前を記したカード型分類システムが付随していた。ここに、筆跡の視覚的な様態は分類を成立させる第一のインデックスとして自立したのである。

このような分類法を可能にしたのは筆跡学である。ドイツ筆跡学協会の設立メンバーでもあったハンス・シュナイケルトは、ヴィルヘルム・ブライヤーとゲオルグ・マイヤーというドイツ筆跡学におけるふたりの先駆者の影響を受けていた。そして筆跡学こそ、筆跡の視覚の様態を、書き手の性格や感情を表す特徴ないしはインデックスとして体系化したのである。したがって、ベルリン警察に設立されたコレクションは、筆跡学が生み出した成果として捉えることができる。

4. 記憶の伝達可能性

－ ゲルハルト・リヒターの絵画連作『1977年10月18日』を手がかりに－ 林 志津江

本発表ではアーカイヴの問題を、記憶を後世に伝える伝達装置という観点から考えてみたい。ここで取り上げる画家ゲルハルト・リヒターの絵画連作『1977年10月18日』(1989年)は、ある記憶についての表現が自明のものではなく、何かを隠蔽しながら、あるいは操作されながら成立していることを浮かび上がらせる。既存のマスメディア報道写真などをもとに描かれた油彩画(「フォト・ペインティング」)のそれぞれと15枚の絵画連作という構成は、写真との対決を通じて絵画の対象提示能力を徹底的に相対化すると同時に、写真を使用する側の意図と写真の対象提示能力というそれぞれ別のものが、マスメディアのような記憶の制度の内部で一体化する事態とプロセスを暴露する。絵画連作の主題は「1977年10月18日」に起こった出来事そのものではなく、出来事についての集合的記憶の形成のされ方ということができるだろう。連作はいかに描くかという絵画にとって本質的な問いの追究でありながら、マスメディアによる一義的な記憶表現に他者性をつきつけ、記憶表現の新たな方法を提示することにも成功している。記憶の伝達可能性そのものを主題とする本作のような美的表象の分析は、アーカイヴの社会的機能という問題を考える上でも重要な視座を与えてくれるものと思われる。

5. 集合的記憶の私的記憶化—中世ヨーロッパにおける「白鳥の騎士伝説」の貴族家系の年代記への移入

會田 素子

中世ヨーロッパにおいて広く伝播していた伝説あるいは民話に「白鳥の騎士」を主題に据えたものがある。現在では 19 世紀にリヒャルト・ヴァーグナー (Richard Wagner, 1813-1883 年) が創作したロマン的歌劇『ローエングリン』(Lohengrin) によって知られている当該伝説は、中世ドイツにおいてヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ (Wolfram von Eschenbach) による『パルチヴァール』(Parzival, 1210 年頃) などの宮廷騎士文学へ移入された他に注目すべき受容形態を得ていた。多数の貴族家系が「自家の祖先が白鳥の騎士である」と主張し、祖先譚として「白鳥の騎士伝説」を採用したことである。本発表では白鳥の騎士との関係を示唆する事物がとりわけ多く残る中世中期ドイツ北西部のクレーヴェ公家 (Kleve) とその親類を例にとり、いかにして一種の集合的記憶ともいうことができる民話や伝説を一族の私的な記憶として文書化あるいはモニュメント化し、年代記記述や、白鳥の騎士に関する記念碑といった媒体にアーカイヴしていったのかを考察する。

また、アライダ・アスマン (Aleida Assmann) が『Erinnerungsräume』(1999 年, 邦題:『想起の空間』) において「名門貴族, 富裕市民の名家, 諸都市は, 歴史を再構成して物語ることで自らのアイデンティティに明確な輪郭を与え, 自身の正当性の基礎を固める主体として構築された」と述べているが, 「白鳥の騎士伝説」を自家の祖先譚に転用することが「アイデンティティの確立」にとっていかなる重要性を持っていたかについて考える。

口頭発表: 文学 2 (10:00~12:35) E 会場: 2 階 D201 教室

司会: 香田 芳樹, 石原 あえか

1. ホーフマンスタール『影のない女』 — 「しるしと詩句」に向かう言葉 —

安徳 万貴子

ホーフマンスタールの『影のない女』は, オペラ台本 (1911-15) 完成後も散文作品 (1913-19) として執筆され, 新たな登場人物も加えられる。ただし内容の本質的な膨らみは, 描き方を変えられた人物に関わっている。精霊の妃が人

間の子を孕み影を得るまでの大筋は変わらないのだが、劇では生まれてくる子の声のみが響くのに対し、物語では皇帝と幻の子供たちの出会いと対話が描かれるのだ。まだ現実には生まれていない者の出現が作品の中間部（第四章）に置かれることで、〈非存在の現れ〉、〈時間の外の存在からの呼びかけ〉が主題として浮かび上がる。むろんこの主題は、妃と皇帝の婚姻にかけられた呪いの解消と結びつく。呪いの言葉に代わって現れる「しるしと詩句」が——しるしから成り終始の不明な手紙、道標、万象を文様化し両端の糸をつないだ織物、未生の子供の歌といったモチーフとともに——無時間的な、生命の源を暗示するのだ。物語の大枠を構成する、精霊と死すべき人間の出会い、未生の生命と人間の出会いは、〈時間の尺度のもとで、所有の対象として仮定された現実〉を越えるような感覚と言葉の可能性を照らし出すことになる。最終的な「しるしと詩句」の現れは、〈意味把握の欲求すら引き起こさずに、言葉がやって来る〉という体験である。その意味で、H. ブロッホがこの作品の執筆を作家による「チャンドス体験の克服」と呼んだ、その克服（あるいは受け入れ）は、作品内部における人物の体験でもあるのだ。

2. 《ナクソス島のアリアドネ》における変容 —瞬間に宿る永遠—

野口 方子

フーゴー・フォン・ホフマンスタールとリヒャルト・シュトラウスの共同作業であるオペラ《ナクソス島のアリアドネ》において提示される諸問題は、悲劇（オペラ・セリア）と喜劇（コメディア・デラルテ）の同時上演、ならびに、それぞれのヒロインであるアリアドネとツェルビネッタの対照的な人物設定から生じている。

先行研究では、「前存在 Präexistenz」から「存在 Existenz」への変容という、ホフマンスタール独自の思想に基づいた指摘がなされているものが少なくないが、この思想がどのように「相反する悲劇と喜劇の対置（並置）」という形状に繋がるのか、そして対照的な性格の登場人物たちが経る変容の瞬間とどのように関わるのか、という点にまで踏み込んで言及しているものは多くは見られない。また、形式上の問題だけではなく、この作品そのものに込められた「相容れないものの融和」という作者の意図の解明は、オペラ研究の側からは殆んどなされていないのが実情である。

そこで本発表では、改訂された1916年版を主に採り上げ、悲劇と喜劇という本来相容れない形式の同時上演から生まれる齟齬を、齟齬のままに終わらせた

ことが、一般に言われるように「失敗」だったのかという点を中心に、ホフマンスタールが常に目指した「アロマーティッシュな解決」に至ろうとする道筋と関連付けて作品解釈を試みた。その結果、前作《ばらの騎士》において描かれた「瞬間に宿る永遠」というテーマから、次の《影のない女》におけるテーマ「聖と俗」へと連なる中間点に存在するものとして、軽視できない作品と位置付けるべきとの考察を得た。

3. ザクセン類型喜劇における「裁き」の構造と諷刺

クヴィストルプの『山羊裁判』とゴットシェート夫人の『遺言状』を例にー

小林 英起子

ゴットシェート派のテオドル・ヨハン・クヴィストルプ (1722-1776) の作品は専門用語交じりの台詞に堅さもあり、あまり研究されてこなかった。『山羊裁判』(1744)は、法律家の作者の専門知識が反映された傑作である。同じく、ルーゼ・ゴットシェート (1713-1763) は『遺言状』(1745)の中で、遺産をめぐる貴族の身内騒動を描いている。本発表ではザクセン類型喜劇の代表作を例に、「裁き」の構造と諷刺の特性を明らかにしたい。

Brüggemann (1970) はザクセン喜劇の言語的特質を調べ、ゴットシェート夫人のフランス趣向喜劇では意図的に卑俗なドイツ語へ転換していると指摘した。Hinck (1965) はザクセン喜劇のヨーロッパ喜劇史における位置付けを説いた。Lukas (2005) は啓蒙喜劇における家族内外の葛藤を図式化してみせた。

裁判形式は人物に白黒をつけ、大団円の構図を形成する。クヴィストルプ喜劇では判事が家庭に法廷を作り、権威付ける姿を諷刺する。書類を食べた山羊まで裁くナンセンスさが痛快である。裁かれる人よりも、裁き手の偏りを照らしだす。ゴットシェート夫人の喜劇では、放蕩や高慢を戒め、献身や奉仕が良徳となる。モリエールの模倣から医者による裁きも加わる。

両者の喜劇では判事や医者等、特定の職業の諷刺があり、彼らが怪しいラテン語で空威張りするコメディヤ・デラルテの手法が見られる。ゴットシェート派は道化追放を演劇改革の要とし、クヴィストルプでは総勢 5 人の家僕が喜劇性を担い、突飛な山羊の登場が道化の代わりである。対照的にゴットシェート夫人では、家僕の役割はわずかな場面での伝言役にしかすぎない。

4. ゲルステンベルク『ウゴリーノ』

—疾風怒濤最初期のダンテとシェイクスピア受容—

今村 武

シュトゥルム・ウント・ドラング最初期の詩人と位置付けられるゲルステンベルク（1737-1823年）が1768年に発表した戯曲『ウゴリーノ』を、二つの文脈から再検討する。すなわち、作品の素材を提供するダンテ『神曲』との比較検討、さらに劇作法に影響を与えているシェイクスピアの創造的な受容について併せて考察する。

ゲルステンベルクが1766年から刊行した「文学の名作にかんする書簡」は、18世紀ドイツ文学におけるシェイクスピア崇拝の初期の例に数えられている。またドイツにおけるダンテ受容研究においても、戯曲『ウゴリーノ』は一定の評価を与えられてきた。最近では、ドイツ語圏とデンマークとの間の文化的交流を促進したかれの活動も脚光を浴びている。本発表は、疾風怒濤におけるダンテとシェイクスピア受容史の観点から改めて『ウゴリーノ』を検討する。

ゲルステンベルクにおける「シェイクスピア流」、古典に対するアプローチの一例を示しつつ、本発表は、後年の疾風怒濤詩人が着目した天才の「想像力」と「自然」をゲルステンベルクに指摘したい。『ウゴリーノ』に描かれているのは、後のシュトゥルム・ウント・ドラング作品にも往々に指摘される作品内の矛盾と、それを乗り越えて進行する物語である。ロココ風詩人として出発したゲルステンベルクは、古典作品との出会いを通じて新しい文学の担い手となる。

口頭発表：文学3（10:00～12:35） F会場：2階 D202教室

司会：八木 輝明，鈴木 伸一

1. 芸術家と原像 —Fr. シュレーゲルとロマン派の視点から—

毛利 真実

Fr. シュレーゲルは『ギリシア文学研究論』（1797）の中で、ギリシア文学こそ「芸術と趣味の原像」と強調し、「最高の美」とは、これ以上美しいものを考えることが出来ないようなある何らかの「具体的な美的存在」ではなく、到達し得ないイデーの「完璧な実例」であると述べている。この視点は、ベンヤミンが指摘するようにゲーテの視点に繋がっており、ロマン派詩人達の見解と異なっている。

ロマン派を代表する二人の詩人、ティークとホフマンは、それぞれ自分達の芸術観を託す人物（ベルクリンガーとクライスラー）を創り上げた。ベルクリンガーは、ティークが夭折した友人ヴァッケンローダーとともに著した『芸術を愛する一修道僧の心情吐露』（1797）、『芸術に関する幻想』（1799）の中に、クライスラーは、『クライスレリアーナ I, II』（1814）、『牝猫ムルの人生観』（1819, 1821）に登場しているが、いずれも音楽家を冷遇する「俗世間」と対立する孤独な存在として描かれている。

ベルクリンガーの登場する作品においては、「芸術に対する真の愛は、宗教的愛でなければならない」という言葉からも明白であるように、芸術と宗教との融合がその根本的要素をなす。シュペングラーに、「ドイツ音楽芸術家のもっとも深い文学的構想」と称されたクライスラーは、原音を所有し、表現できる人物に憧れながら、自らの才能のなさに苦悩する。又、職業音楽家ホフマンの旺盛な風刺の精神を代弁する存在でもある。これまで、この二人の芸術家に託された芸術観と、Fr. シュレーゲルとゲーテの見解との相違についての研究は、殆どなされてこなかった。

本発表においては、このような事実をふまえ、当時の詩人達の「芸術家と原像」に関する様々な視点を明らかにし、その違いを考察することを目的としたい。

2. 異教との架け橋

—ボブプロフスキーの短編『D. B. H.』について—

永畑 紗織

ヨハネス・ボブプロフスキーの『D. B. H.』（1963）は、ヘルシンボリ（現スウェーデン）で生まれたとされる 17 世紀の音楽家ディートリヒ・ブクステフーデが愛弟子ニコラウス・ブルーンズと初めて会った日のことを描いた短編である。作者がブクステフーデを作品の題材に選んだのは、東プロイセンで生まれ第二次大戦後のドイツの領土縮小で故郷を喪失した作者の置かれている状況と、過去に犯した罪が原因で故郷からリューベックへ逃れねばならなかった者として描かれているブクステフーデの状況とを重ねる視点を有していたからであった。このことを踏まえた上で、『D. B. H.』というタイトルは「D と H のはざまにある B」を記号化したものであることを明らかにしたい。D は現実世界としてのドイツを、H は異教（Heidentum）の世界もキリスト教の神（Herr）の世界も包含する、ある意味で理想化された故郷（Heimat）を表しており、Buxtehude だけでなく Bruhns や Bobrowski もそのはざまに立つ B である。ボブプロフスキーは故郷をキリスト教化される以前の異教の時代まで含めた過去の記憶を保持する地域

として捉えた。自らの故郷である東欧に住む諸民族とドイツ人の架け橋となることが彼の課題であり、ブクステフーデにはドイツと故郷のはざまに立つ人間としての作者が重ね合わせられ、三十年戦争を直接は体験していない若きブルーンズにはドイツ人と諸民族、ドイツと故郷、現実と理想をつなぐ架け橋となる希望が託されているのである。

3. Schweigen des Verstummen – Stille Rebellion und aggressive Gehorsamkeit in Thomas Bernhards Drama „Ein Fest für Boris“ –

Reika Hane

Ausgehend von der Unterscheidung zwischen Schweigen (im Sinne eines gewählten Nicht-Redens) und Verstummen (im Sinne eines Nicht-Reden-Könnens) wird es in meinem Vortrag um Möglichkeiten und Unmöglichkeiten gehen, im Verstummen zu schweigen, d. h. in einer Situation des erzwungenen Stillseins doch zum Subjekt einer Schweige-Handlung zu werden.

Dies möchte ich anhand von Thomas Bernhards Drama „Ein Fest für Boris“ erörtern, das die durch Asymmetrie gekennzeichneten Interaktionen zwischen einer mächtigen und einer unterordneten Figur thematisiert: Während die Herrin extrem redselig ist, bleibt die Dienerin schweigsam. Ihr Schweigen ist jedoch nicht immer Ausdruck ihrer Ohnmacht.

(1) Die Dienerin schweigt mehr, als die Herrin von ihr verlangt. Durch die exzessive Unterlassung, die sich formal von der durch die Herrin geforderten Unterlassung nicht unterscheidet, differenziert die Dienerin ihr Schweigen und leistet so Widerstand gegen die Macht der Herrin.

(2) An der Figur der Herrin wird vorgeführt, wie die Mächtige unter dem Schweigen derjenigen leidet, die sie selber zum Schweigen zwingt. Indem die Herrin im Verstummen der Dienerin ein Schweigen (Verschweigen) zu hören glaubt, *macht* sie die Verstumme zur Schweigenden. Die Figur der Herrin lässt sich als Karikatur einer Macht lesen, die unter dem Geheimnis leidet, das sie durch ihre erfolgreiche Unterdrückung selber erzeugt.

Bei meinen Betrachtungen schließe ich an Roland Barthes an, der in *Das Neutrum* von einer polyphonen Struktur des Schweigens spricht.

4. Krieg und Frieden bei Peter Handke

Leopold Federmair

Das umfangreiche und vielschichtige Werk von Peter Handke zeigt sich mehr und mehr in seinen Gesamtkonturen und Entwicklungszusammenhängen. In letzter Zeit sind zwei Monographien über diesen Autor erschienen: *Peter Handke. Unterwegs ins neunte Land* von Fabjan Hafner und die Rowohlt-Monographie von Hans Höller. In diesen Arbeiten stellt sich mehr und mehr heraus, daß die Thematik von Krieg und Frieden sowie der Versuch, eine Epik des Friedens zu schaffen, im Werk von Peter Handke, einem sogenannten „Kriegskind“, von zentraler Bedeutung sind. Diese Aussage – oder These – bezieht sich nicht nur auf Handkes Schriften zu den Jugoslawienkriegen, sondern auf den Großteil seiner Werke mit autobiographischem Hintergrund. In den letzten zwei Jahren habe ich mich mit diesen Aspekten beschäftigt [siehe *Nicht nichts. Ex-jugoslawische Reisen deutschsprachiger Schriftsteller*, in: Weimarer Beiträge 1 (2010), S. 69-83; siehe auch meinen Aufsatz *Befreiung und Heimkehr. Wandlungen des Schriftstellers Peter Handke* in: manuskripte 186 (2009), S. 131-147] und möchte diese Arbeit weiter vertiefen. In meinem Vortrag werde ich im einzelnen auf konflikthafte, gewaltbesetzte Szenen in den sonst meist „friedfertigen“ Romanen und Erzählungen wie *Die Angst des Tormanns beim Elfmeter*, *Der Chinese des Schmerzes* und – besonders – in *Mein Jahr in der Niemandsbucht* eingehen. In dem zuletzt genannten Werk schildert der Erzähler als „Waldgänger“ etwas, das man als „Pilzkrieg“ bezeichnen könnte. Es wurde in der Sekundärliteratur häufig darauf hingewiesen, daß Handke spätestens seit *Die Lehre der Sainte-Victoire* das „sanfte Gesetz“ Adalbert Stifters intensiv rezipiert hat. Ich möchte diesen Zusammenhang erweitern und darauf hinweisen, daß nicht nur

der Versuch einer Friedensliteratur, sondern auch die ständige Bedrohung durch Irrationalität und, damit verbunden, durch Gewaltakte, durch Atavismen, die plötzlich in den Alltag einbrechen, Handke mit Stifter verbinden: eine Dialektik des Kriegs im Frieden. Was diesen Aspekt betrifft, so kann ich meine knappen Bemerkungen über Handkes Stifter-Rezeption in der Monographie *Adalbert Stifter und die Freuden der Bigotterie* (Salzburg, Otto Müller Verlag 2005) aufnehmen und vertiefen.

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～11:55）G会場：2階 D203 教室

司会：Marco Raindl, 北條 彰宏

1. コンテンツとタスク中心のドイツ語教授法

－初習ドイツ語学習者が文法能力とコミュニケーション能力を統合することは可能か？－

濱野英巳, Michael Schart

本発表は、コンテンツ中心、タスク中心の教授法が外国語学習過程と学習行動に与える影響について実証的に解明することを目的とした研究の一部を成すものである。外国語教育の現場にコンテンツ・タスク中心の教授法が登場して久しいが、授業での実践については明らかになっていない点が多く、特に当該言語能力の習得との関連については未だ議論の余地があり、縦断的な研究プロジェクトで明らかにされたものは多くない。慶應義塾大学法学部インテンシブコースでは、こうした研究上の穴を埋めるため、外部研究者の協力を得て、主に質的な研究の手法でさまざまな視点から検証を行ってきた。2009年度は、初年次4コマの授業を2コマずつ担当するドイツ人教員と日本人教員の双方が全面的にコンテンツ・タスク中心の教授法を採用し、アクションリサーチを行った。その結果、学習者が産出したテキストには、文法の複雑さ、正確さの双方において十分な発達が見られた。一方、テキストの量と流暢さについても不足は見られなかった。一般に、意味内容に焦点を当てた授業では流暢さが、文法に焦点を当てた授業では正確さが発達するとされるが、第二言語習得論、認知心理学による知見を援用し、適切なタイミングで文法に焦点を当てることで、コンテンツとタスク中心の教授法を採用した場合にも、文法能力とコミュニケーション能力の統合を促し得る、ということが確認された。

2. „Sprachaufmerksamkeit“ im Grammatikunterricht: Überlegungen zur Vermittlung des Artikelgebrauchs im Deutschen

Angela Lipsky

Der Erwerb des deutschen Artikelsystems (mit Definit-, Indefinit- und Nullartikel) stellt bekanntlich für japanische Deutschlernende eine große Herausforderung dar. Trotzdem werden in vielen Grammatikübungsbüchern und Lehrwerken die Flexionsparadigmen mit Genus-, Numerus- und Kasusunterscheidungen in den Vordergrund gestellt, die Verwendungsweisen der Artikel aber meist nur sehr kurz behandelt. Hinzu kommt, dass didaktische Verfahren nach dem Schema „explizite Regelpräsentation - Anwendungsübungen“ kaum der Komplexität der Artikelfunktionen gerecht werden können, da für die richtige Verwendung der Artikel neben semantischen auch kontextuelle und pragmatische Faktoren, wie das gemeinsame Wissen der Kommunikationspartner, eine Rolle spielen. In dem Vortrag wird die Artikelsetzung in verschiedenen Texten von Lernern analysiert und versucht, besondere Schwierigkeiten (japanischer) Deutschlernender beim Erwerb des Artikelsystems aufzuzeigen. Dabei soll deutlich gemacht werden, warum Lerner speziell von Verfahren profitieren können, die in den letzten Jahren unter den Begriffen „Aufmerksamkeit“ und „Formfokussierung“ bekannt geworden sind (siehe Paul R. Tselikas-Portmann und Manfred Schifko). Grammatikvermittlung, die sich auf diese Begriffe beruft, möchte anhand konkreter Aufgaben die Aufmerksamkeit auf bestimmte sprachliche Formen lenken, damit die Lerner Zusammenhänge von Form, Bedeutung und Verwendung erkennen und eigene Regeln formulieren können. Als Beispiele für sprachaufmerksamkeitsfördernde Aufgaben zur Vermittlung der Artikel werden in diesem Beitrag unter anderem Aufgaben vorgestellt, die von Lernerfehlern und Lernertexten ausgehen.

3. Wie wurde das Lernverhalten unserer Studierenden durch Testlernen geprägt? – Anregung zu einer Auseinandersetzung mit dem Thema „Washback-Effekt“ in Japan

Ralph Degen

Washback-Effekt (jap. 波及効果) ist ein Begriff, mit dem die meisten Fremdsprachenlehrenden nicht vertraut sind. Er bezeichnet den Einfluss wichtiger, über die Karriere des Testnehmers entscheidender Sprachprüfungen auf Lernverhalten, Unterrichtspraxis, Curriculumbildung, Lehr- und Übungsmaterialien, die Sprachlehrindustrie usw. Wenn man nur an die Aufnahmeprüfungen für die Universität (allen voran der *sentâ shiken*) denkt, wird sofort klar, von welcher zentralen Bedeutung der Begriff des Washback im japanischen Kontext ist.

Zunächst soll deshalb kurz definiert werden, was mit positivem und negativem Washback – vor allem in Bezug auf Japan – gemeint ist, und in diesem Zusammenhang auf die Bedeutung der Konstruktvalidität eingegangen werden. Hierzu bietet sich ein exemplarischer Blick auf den Englischteil des *sentâ shiken* an. Das Thema ist auch für uns als Deutschlehrende an der Universität relevant, da die Lernersozialisation unserer Studierenden stark durch Prüfungslernen geprägt ist, unabhängig davon, um welche Sprache es sich handelt.

Mittlerweile liegt einiges an Literatur zu dem Themenkomplex vor. Eine umfangreiche empirische Forschung gibt es in Japan allerdings noch nicht. Deshalb ist es ein Anliegen dieses Referats, Interesse für das Thema zu wecken, dass dann vielleicht zu empirischen Untersuchungen führt. Abschließend soll daher ein Ausblick auf mögliche empirische Forschung gegeben werden.

口頭発表：文化・社会 2 (12:00~12:35) G会場：2階 D203教室

司会：Marco Raindl, 北條 彰宏

1. Der Baader-Meinhof Komplex: Buch – Film – Realität

Christian W. Spang

Bei dem hier vorgestellten Kinofilm *Der Baader-Meinhof-Komplex* (2008) handelt es sich um eine Adaption des gleichnamigen Klassikers von Stefan Aust (1985) zur ersten Phase des RAF-Terrors in Westdeutschland. Nacherzählt wird die Entwicklung von den Studentenprotesten 1967/68 bis zum „deutschen Herbst“ 1977. Dabei stehen auf der einen Seite Andreas Baader, Gudrun Ensslin und Ulrike Meinhof sowie auf der anderen Seite das Bundeskriminalamt und dessen Chef, Horst Herold, im Zentrum der Betrachtung.

Im Vortrag soll zunächst die damalige gesellschaftliche Realität beleuchtet werden. Anschließend möchte ich kurz auf einige Unterschiede zwischen Buch und Film hinweisen. Als Vergleichsobjekt wird gelegentlich der Kinofilm „*Jitsuroku Rengō Sekigun*“ (2008) von Wakamatsu Kōji herangezogen.

Thesen: Als die RAF ihren bewaffneten Kampf begann, war bereits Willy Brandt (SPD) Bundeskanzler. Der eigentliche Feind der RAF, die vermeintlich faschistisch-imperialistische Adenauer-Republik existierte nicht mehr. Allein schon aus diesem Grund musste die Revolutions-Idee der RAF scheitern. Der Film stellt sowohl die Terroristen als auch die Polizei zu positiv dar. Beide Seiten hätte man noch drastischer zeichnen können. Die Opferperspektive wird vernachlässigt. Allerdings muss man bei der Beurteilung des Filmes beachten, dass es nicht um eine Neuinterpretation des RAF-Terrors ging, sondern um die Adaption von Stefan Austs Buch. Als solche ist der Film gelungen.

ブース発表（11:30～13:00） I会場：地下1階 DB109 教室

（ブース発表は途中での出入り自由です。）

・クラウドを活用したドイツ語の授業—Google のサービス群を中心に—

三澤 真

教師が学生・生徒を指名したとき、あたらなかった者は傍観者になってはいないだろうか。本発表の目標は、「クラウド」と呼ばれるサービスを活用することで、学生・生徒の一人ひとりが発信者となり、さらにその情報を共有して、出席者が主体的に授業に関わる方法を探ることにある。

「クラウドコンピューティング」という用語には様々な定義が存在するが、本発表では「インターネット上に保存されたデータをユーザーがブラウザで編集するサービス」と位置づける。Google ドキュメントをはじめとする多くのクラウド型サービスは、複数のユーザーで同時に編集することが可能である。

Google スプレッドシートは表計算サービスだが、アンケート作成機能「フォーム」を利用して学習者が出題と回答を行うクイズサイトを運営することもできる。

また Picasa ウェブアルバムを利用すれば、教師が用意した画像を提示するだけでなく、学習者に携帯電話のカメラ機能を活用して手書きメモやイラストを送信してもらい、その画像を教室で即時に映し出すこともできる。

上記のような Google のサービス群は、Moodle などの CMS と比較すると導入の手間が少なく、運営に必要な IT スキルも基礎的なもので足りる。

Google アカウントもしくは G メールアドレスをお持ちの方は発表当日に使用して頂きたいが、未取得でも共同編集できる環境を用意する予定である。